

2016 年度 新任教員対象

F Dプログラム

受講ガイドブック

立命館大学 教育開発推進機構

立命館大学のF D（Faculty Development）の定義

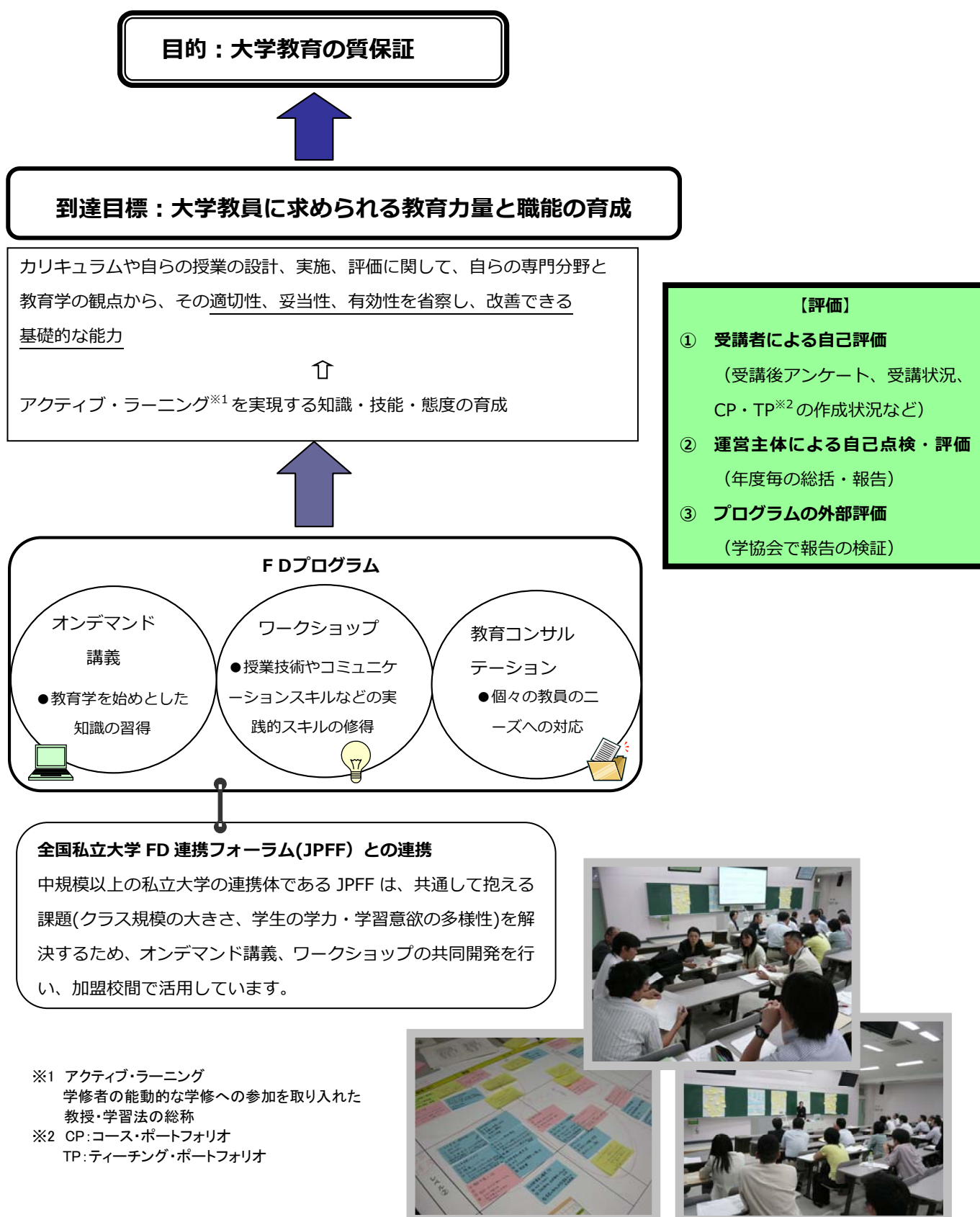
「建学の精神と教学理念を踏まえ、学部・研究科・他教学機関が掲げる理念と教育目標を実現するために、カリキュラムや個々の授業についての配置・内容・方法・教材・評価等の適切性に関して、教員が職員と協働し、学生の参画を得て、組織的な研究・研修を推進するとともに、それらの取組の妥当性、有効性について継続的に検証を行い、さらなる改善に活かしていく活動」

● 目 次

1. F Dプログラム概要	2
(1) F Dプログラムの俯瞰図	
(2) F Dプログラムのねらい	
(3) F Dプログラムが保証する教授・学習支援能力	
(4) F Dプログラム受講期間	
(5) F Dプログラム構成	
(6) 修了について	
2. 2016 年度提供講義・講座一覧	5
(1) オンデマンド講義（ビデオ・オン・デマンド：VOD）	
(2) ワークショップ（WS）	
3. 教授・学習支援能力と講座編成 対応表（カリキュラム・マップ）	8
4. 受講モデル（2 年間受講）	9
5. オンデマンド講義（ビデオ・オン・デマンド：VOD）	10
(1) 受講方法	
(2) オンデマンド講義へのアクセス方法および視聴手順	
(3) アンケート回答方法	
6. ワークショップ（WS）	15
7. 教育コンサルテーション（CS）	15
8. ティーチング・ポートフォリオ（TP）の作成について	17
9. コース・ポートフォリオ（CP）の作成について	26
10. 新任教員教育推進費活用実践報告書のご提出について	29
● 資料	
オンデマンド講義 講義概要一覧	30
FD 関連図書、関連リンク集	51

1. FDプログラム概要

(1) FDプログラム俯瞰図



(2) F Dプログラムのねらい

F Dプログラムとは、教員が自らの授業を専門分野と教育学の観点から省察することが出来る知識、技能、態度、特にアクティブ・ラーニングを実践する能力を修得する研修プログラムです。

私立大学には、クラス規模の大きさ、教員の持ちコマ数の多さ、学生の学力と学習意欲の多様性など、多くの困難な教育条件が存在します。立命館大学では、新任の先生方が本プログラムを受講することを通して、大学教員に求められる教育力量と職能を育成し、大学教育の質を保証したいと考えています。

(3) F Dプログラムが保証する教授・学習支援能力

項 目	教授・学習支援能力
1.学習活動の設計	1-1. 教授と学習に関する一般的理論を理解する。 1-2. 学生はいかに学ぶかを理解したコース設計ができる。 1-3. 学習者中心の授業の設計と計画ができる。 1-4. 学習者中心の授業に必要な目標設定とその適切な記述ができる。 1-5. 学習者中心の授業において適切な評価観点の設定と評価方法の選択ができる。 1-6. アクティブ・ラーニング（とくに PBL（プロジェクト・ベースド・ラーニング））を取り入れた授業の設計と計画ができる。
2.教授および学習活動の展開	2-1. 高等教育において学習者中心の授業を実施するための教授・学習方略、方術を理解する。 2-2. 学習を支援する様々なテクノロジーの特徴、利用方法を理解し、授業に用いる。 2-3. 学習展開に応じて柔軟に授業を修正・転換できる。 2-4. 学生と協同して授業を進めることに意欲をもつ。 2-5. 専門分野における調査研究や実践のプロセス、成果を積極的に授業に取り込む。 2-6. アクティブ・ラーニングを取り入れた授業の実施ができる。
3.授業の質の保証	3-1. 教授・学習方略、方術に応じた教育効果の評価方法を理解する。 3-2. 客観的かつ厳格な成績評価ができる。 3-3. 教育効果の評価結果について学生に効果的なフィードバックができる。 3-4. 自らの授業や実践を省察し、改善することができる。 3-5. アクティブ・ラーニングを取り入れた授業の評価ができる。
4.効果的な学習環境および学習支援環境の開発	4-1. 学習コミュニティの形成を促進する。 4-2. 様々なメディアやツールを活用し、効果的な学習環境の整備や学習支援ができる。 4-3. 学習支援のためのツールや環境の開発ができる。
5.自己の専門性の継続的な発展	5-1. 学生の多様性を認め、尊重する。 5-2. 自らのキャリアの設計と継続的な開発に努める。 5-3. 大学教員集団の一員として働く。 5-4. 常に高等教育や教授法に関する新しい知識を取り入れることに努める。
6.大学特有の必要とされる力	6-1. 立命館大学の教学について理解する。

(4) F Dプログラム受講期間

着任年度とその翌年度 計 2 年間（最大 4 年間まで延長可能）

(5) F Dプログラム構成

本プログラムは、教員の 4 つのアカデミック・プラクティス（教育、研究、社会貢献、管理運営）に対して、①教育学をはじめとする系統的な理論を伝えるオンデマンド講義、②授業技術やコミュニケーションスキルを育成するワークショップ、③個々の教員ニーズに応える教育コンサルタントによる日常的な教育コンサルテーションから構成されています。

(6) 修了について

教育開発推進機構が主催する基本プログラム（下記の修了要件を参照）を修了した方には、F Dプログラムの修了証を発行します。本修了証は、受講者が私立大学の困難な教育条件（クラス規模の大きさ・教員の持ちコマ数の多さ・学生の学力と学習意欲の多様性）を改善するために必要な、自らの授業を専門分野と教育学の観点から省察することができる知識、技能、態度、特にアクティブ・ラーニングを実践する能力を修得するための研修プログラムを修了したことを証するものです。

修了証は修了要件によって、以下の 3 つの種類に分かれています。

「オナーズ (honors) 修了」

修了要件

- ①VOD の受講・設問回答 15 講義以上（必修 8 講義＋選択 15 講義から 7 講義以上を選択）
- ②WS への参加 10 回以上（必修 4 講座＋選択 8 講座から 6 講座以上を選択）
- ③TP の作成・提出

「スタンダード (standard) 修了」

修了要件

- ①VOD の受講・設問回答 9 講義以上（必修 8 講義＋選択 15 講義から 1 講義以上を選択）
- ②WS への参加 6 回以上（必修 4 講座＋選択 8 講座から 2 講座以上を選択）
- ③TP の作成・提出

「ミニマム (minimum) 修了」

修了要件

- ①VOD の受講・設問回答 9 講義以上（必修 8 講義＋選択 15 講義から 1 講義以上を選択）
- ②WS への参加 6 回以上（必修 4 講座＋選択 8 講座から 2 講座以上を選択）
- ③CP の作成・提出

2. 2016 年度提供講義・講座一覧

(1) オンデマンド講義 (ビデオ・オン・デマンド : VOD)

N o.	講座名	テーマ	講師 (敬称略)	所属 (※撮影時点)	撮影(更新) 年度	対応 言語
1	高等教育論Ⅰ	現代の高等教育	金子 元久	東京大学	2014	日・英
2	高等教育論Ⅱ	高等教育研究史	有本 章	比治山大学	2009	日
3	高等教育論Ⅲ	大学改革とFD研究	江原 武一	立命館大学	2013	日・英
4	高等教育論Ⅳ	大学評価論	安岡 高志	立命館大学	2014	日・英
5	高等教育論Ⅴ	高等教育政策：戦後日本の大学政策 (転換期の大学政策、海外との比較)	高野 和子	明治大学	2009	日
6	高等教育論Ⅵ	接続教育Ⅰ：初年次教育の取組	山田 礼子	同志社大学	2009	日
7	高等教育論Ⅶ	大学の国際化	モンテ・カセム	立命館大学	2010	日・英
8	教授学習理論Ⅰ	教授・学習の理論と教育実践(1)	久世 均	岐阜女子大学	2015	日・英
9	教授学習理論Ⅱ	教授・学習の理論と教育実践(2)	久世 均	岐阜女子大学	2015	日・英
10	教授学習理論Ⅲ	アクティブ・ラーニングの理論と実践に おける課題	三浦 真琴	関西大学	2009	日
11	教育方法論Ⅰ	教育工学の観点から	林 徳治	立命館大学	2015	日・英
12	教育方法論Ⅱ	高等教育における授業技術	木野 茂	立命館大学	2014	日・英
13	教育方法論Ⅳ	学習教材作成における著作権等の理解	坂井 知志	常磐大学	2012	日
14	教育方法論Ⅴ	学生授業評価の読み方と授業への活用	安岡 高志	立命館大学	2009	日
15	教育方法論Ⅵ	情報活用基礎：ICTを活用した 学習コミュニティづくり	中島 英博	名城大学	2009	日
16	授業設計論Ⅰ	大学の授業の設計	沖 裕貴	立命館大学	2013	日・英
17	授業設計論Ⅱ	授業設計と授業方法・技術・評価	横田 学	京都市立芸術 大学	2009	日
18	教育評価論Ⅰ	成績評価の意味と方法	鳥居 朋子	立命館大学	2015	日・英
19	教育評価論Ⅱ	目標準拠測定に基づく評価	野嶋 栄一郎	早稲田大学	2009	日
20	教育評価論Ⅲ	ティーチング・ポートフォリオとは	栗田 佳代子	大学評価・学位授 与機構	2009	日
21	心理学Ⅰ	青年期の心理	白井 利明	大阪教育大学	2015	日・英
22	心理学Ⅱ	発達の原因と各段階の特性	西垣 順子	大阪市立大学	2015	日・英

23	心理学Ⅲ	臨床心理学の基礎と応用	徳田 完二	立命館大学	2015	日・英
24	心理学Ⅳ	発達障害のある学生の学び －アスペルガー症候群を中心に－	荒木 穂積	立命館大学	2011	日
25	研究者倫理Ⅰ	教員と学生の教育・研究を促進するツールとしての研究倫理	望月 昭	立命館大学	2009	日
26	研究のアウトリーチ活動Ⅰ	研究者にできる多様なアウトリーチ活動の紹介	半田 利弘	東京大学	2009	日
27	立命館学Ⅰ	学習者が中心となる教育をするために －立命館大学での教育－	中村 正	立命館大学	2008	日・英
28	立命館学Ⅱ	立命館学園通史 －1900年～2008年－	坂本 和一	立命館大学	2008	日
29	立命館学Ⅲ	1980、90年代の『学園創造』 －とくに、BKC開設・理工学部拡充移転、BKC新展開を中心に－	坂本 和一	立命館大学	2008	日
30	立命館学Ⅳ	立命館アジア太平洋大学（APU）はいかにして創られたか	坂本 和一	立命館大学	2008	日
31	大学管理運営Ⅰ	大学教職員のための大学管理運営基礎	肥塚 浩	立命館大学	2015	日・英
32	大学管理運営Ⅱ	近年の大学改革の進展を踏まえた大学管理運営の新たな発想	山本 眞一	桜美林大学	2015	日・英
33	大学管理運営Ⅲ	リスクマネジメント：大学教員のためのキャンパスハラスメント	井口 博	東京ゆまにて法律事務所	2011	日
34	大学管理運営Ⅳ	IR 入門	鳥居 朋子	立命館大学	2010	日
35	大学管理運営Ⅴ	業務改善のための IR	池田 輝政	名城大学	2010	日
36	大学管理運営Ⅵ	ADMINISTRATIVE STAFF DEVELOPMENT 大学管理職の職能開発	ブルース・ストロナク	テンプル大学ジャパン	2010	日・英
37	大学管理運営Ⅶ	PDCA サイクルを理解する	安岡 高志	立命館大学	2010	日
38	大学管理運営Ⅷ	教職協働による大学運営	大島 英穂	立命館大学	2012	日
39	FD概論Ⅰ	大学におけるミクロ・ミドルレベルでのFD活動	佐藤 浩章	愛媛大学	2010	日
40	FD概論Ⅱ	大学におけるマクロレベルでのFD活動	川島 啓二	国立教育政策研究所	2010	日
41	プロジェクト・マネジメント	FD活動推進等の大学経営革新に活かすプロジェクトマネジメント	牧野 光昭	(社)日本能率協会	2010	日

●＝必修 ◎＝選択 ○＝オプション（修了要件外）

(2) ワークショップ (予定)

位置 づけ	講座名・テーマ	到達目標	開催日<予定>
◎	「教授学習理論演習Ⅱ」 アクティブ・ラーニングの 方法と実践 ～ICTの活用を中心に	①ICTを活用したアクティブ・ラーニングの方法を修得し、実践することができる(技能) ②各自が実践しているアクティブ・ラーニングの交流を通して、自らの授業を省察できる(態度)	2016年 4月23日(土)
◎	「教育評価論演習ⅢA」 コース・ポートフォリオ とは	①コース・ポートフォリオ作成の意義を理解する(知識) ②コース・ポートフォリオの作成方法を説明できる(知識)	2016年 4月23日(土)
◎	「心理学演習Ⅲ」 アサーション・トレーニング	①自分の指示や指導の仕方の特徴を知る(技能) ②自分の気持ちも相手の気持ちも大切にしたい指示、指導ができる(技能)	2016年 8月1日(月)
◎	「教育評価論演習ⅢB」 コース・ポートフォリオの 作成	①1つの科目(コース)のシラバス教材、授業運営記録、評価アンケートの結果など、自分の教育活動の根拠となる資料を用いて、コース・ポートフォリオを作成することができる(技能) ②授業改善のためコース・ポートフォリオを積極的に活用する(態度)	2016年 8月1日(月)
●	「授業設計論演習Ⅰ」 シラバスと授業の到達目標 の書き方	①シラバスと授業の到達目標を観点別に行動目標で表現できる(技能)	2016年 9月15日(木)
●	「授業設計論演習Ⅱ」 強制連結法による授業設計	①強制連結法を用いて授業を設計することができる(技能)	2016年 9月15日(木)
●	「授業設計論演習Ⅲ」 マイクロティーチング と評価	①強制連結法を用いて設計した授業を実施、相互評価することができる(技能) ②公開授業等において、授業評価を行う際に求められる観点を知り、適切な評価を行うことができる(技能、態度)	2016年 9月15日(木)
●	「教育評価論演習Ⅰ」 学習到達度評価 ～ルーブリック評価の実践	①授業の到達目標に合った試験、課題等が作成できる(技能) ②学生に対し評価の観点や評価方法について適切に説明できる(技能) ③評価結果を学生にフィードバックすることができる(技能)	2016年 9月16日(金)
◎	「教育評価論演習ⅡA」 ～ティーチング・ポートフ ォリオの作成①	①実際のシラバス教材、評価アンケートの結果など、自分の教育活動の根拠となる資料を用いて、ティーチング・ポートフォリオを作成することができる(技能) ②授業改善のためティーチング・ポートフォリオを積極的に活用する(態度)	2016年 10月29日 (土)
◎	「教育評価論演習ⅡB」 ～ティーチング・ポートフ ォリオの作成②	①実際のシラバス教材、評価アンケートの結果など、自分の教育活動の根拠となる資料を用いて、ティーチング・ポートフォリオを作成することができる(技能) ②授業改善のためティーチング・ポートフォリオを積極的に活用する(態度)	2016年 10月29日 (土)
◎	「教育方法論演習Ⅱ」 良い授業のための留意点 - 話し言葉に着目して ～図形並べ	①自分の指示すべき情報が、どの程度、口頭で的確に伝達されるかを体験する(知識) ②フィードバック(質問、聞き直し)がある場合とない場合で、どの程度口頭による指示の伝達が異なるかを体験する(知識) ③教員が得意とする言語情報(verbal communication)の限界を体験する(知識、技能)	2016年 12月3日(土)
◎	「心理学演習Ⅱ」 受容的に聴く力 ～イヌ・バラ法	①犬、バラ法を用い、「あいづち」や「相手の言葉を繰り返す」技術を身に付ける(技能) ②相手の話の背景にある意見や気持ちを思い浮かべることができる(技能)	2016年 12月3日(土)

● = 必修、◎ = 選択

* 詳しくは教育開発推進機構 HP (<http://www.ritsumeai.ac.jp/acd/ac/itl/index.html>) をご覧ください。

3. 教授・学習支援能力と講座編成 対応表（カリキュラム・マップ）

分野	教育	研究	管理運営
教授・学習支援能力			
1. 学習活動の設計	(VOD)○授業設計論Ⅰ (VOD)○授業設計論Ⅱ (W S)●授業設計論演習Ⅰ (W S)●授業設計論演習Ⅱ (W S)●授業設計論演習Ⅲ		
2. 教授および学習活動の展開	(VOD)○教授学習理論Ⅰ (VOD)○教授学習理論Ⅱ (VOD)○教授学習理論Ⅲ (VOD)●教育方法論Ⅰ (VOD)●教育方法論Ⅱ (VOD)◎教育方法論Ⅵ (VOD)●心理学Ⅰ (VOD)◎心理学Ⅱ (VOD)◎心理学Ⅲ (W S)◎教授学習理論演習Ⅱ (W S)◎教育方法論演習Ⅱ (W S)◎心理学演習Ⅱ (W S)◎心理学演習Ⅲ		(VOD)●FD 概論Ⅰ
3. 授業の質の保証	(VOD)◎教育評価論Ⅰ (VOD)◎教育評価論Ⅱ (VOD)◎教育評価論Ⅲ (VOD)◎教育方法論Ⅳ (VOD)●教育方法論Ⅴ (W S)●教育評価論演習Ⅰ (W S)◎教育評価論演習Ⅱ A (W S)◎教育評価論演習Ⅱ B (W S)◎教育評価論演習Ⅲ A (W S)◎教育評価論演習Ⅲ B		
4. 効果的な学習環境および学習支援環境の開発	(VOD)●心理学Ⅳ		(VOD)○大学管理運営Ⅲ (VOD)◎大学管理運営Ⅳ (VOD)○大学管理運営Ⅴ (VOD)○大学管理運営Ⅵ (VOD)◎大学管理運営Ⅶ (VOD)◎FD 概論Ⅱ (VOD)○プロジェクト・マネジメント
5. 自己の専門性の継続的な発展	(VOD)●高等教育論Ⅰ (VOD)◎高等教育論Ⅱ (VOD)◎高等教育論Ⅲ (VOD)◎高等教育論Ⅳ (VOD)○高等教育論Ⅴ (VOD)◎高等教育論Ⅵ (VOD)○高等教育論Ⅶ	(VOD)○研究のアウトリーチ活動Ⅰ (VOD)◎研究者倫理Ⅰ	(VOD)◎大学管理運営Ⅰ (VOD)○大学管理運営Ⅱ (VOD)○大学管理運営Ⅷ
6. 大学に特有の必要とされる能力	(VOD)●立命館学Ⅰ (VOD)○立命館学Ⅱ (VOD)○立命館学Ⅲ (VOD)○立命館学Ⅳ		

VOD＝オンデマンド講義 WS＝ワークショップ ●＝必修 ◎＝選択 ○＝オプション（修了要件外）

※「社会貢献」分野についても今後検討していく予定です。

4. 受講モデル（2年間受講）

● = 必修 ◎ = 選択 ☆ = 必修ではありませんが受講を推奨いたします。

	オンデマンド講義 (VOD)	ワークショップ (WS)	教育コンサルティング	
			ランチタイム FD 個別相談	ティーチング・ ポートフォリオ (TP)
	1 年目			
4 月		◎教授学習理論演習Ⅱ ◎教育評価論演習ⅢA (CP)	担当者との顔あわせ	オリエンテーション (TP 概要説明)
5 月	●立命館学Ⅰ 【VOD 集合研修】		ランチタイム FD(CP 持参)	
6 月	●教育方法論Ⅰ 【VOD 集合研修】		ランチタイム FD(CP 持参)	
7 月				
8 月	●FD 概論Ⅰ ●心理学Ⅰ	◎心理学演習Ⅲ ◎教育評価論演習Ⅲ B (CP)		
9 月		●授業設計論演習Ⅰ ●授業設計論演習Ⅱ ●授業設計論演習Ⅲ ●教育評価論演習Ⅰ		
10 月	●教育方法論Ⅴ 【VOD 集合研修】		ランチタイム FD(CP 持参)	
11 月	●心理学Ⅳ 【VOD 集合研修】		ランチタイム FD(CP 持参)	
12 月		◎教育方法論演習Ⅱ ◎心理学演習Ⅱ		
1 月				
2 月				
3 月	●高等教育論Ⅰ ●教育方法論Ⅱ			
	2 年目			
4 月				
5 月			ランチタイム FD(CP 持参)	
6 月			ランチタイム FD(CP 持参)	
7 月				
8 月	関心のある選択科目			
9 月				
10 月		☆◎教育評価論演習Ⅱ A (TP) ☆◎教育評価論演習Ⅱ B (TP)	ランチタイム FD(CP 持参)	TP 作成開始
11 月			ランチタイム FD TP 作成に向けた個別相談	作成と個別相談
12 月	受講修了			
1 月				TP 提出
2 月				
3 月	修了式			

5. オンデマンド講義（ビデオ・オン・デマンド：VOD）

（1）受講方法

ビデオによるオンデマンド講義は、立命館大学の manaba+R 上で視聴できます。1 つの講義は 3 つのパートに分かれており、概ね各パート約 15 分程度、全体約 45 分程度で構成されています。それぞれの講義について、「講義概要」、「到達目標」、「講義資料」（印刷用）があります。いずれも manaba+R 上で提供しており、繰り返し受講することができます（講義の視聴は Internet Explorer が推奨環境になります）。

【注意事項】

- ①著作権の問題により、ダウンロードした資料の他者への配布はお控えください。オンデマンド講義の映像に関する著作権は、立命館大学教育開発推進機構に帰属します。講義内で使用しているテキスト・スライドの著作権は、講師に帰属します。ただし、立命館大学教育開発推進機構に本プログラムの目的である FD 推進に関する活用に限り使用权が認められています。
- ②オンデマンド講義をご視聴になるには、お使いの端末に「Adobe Flash Player」がインストールされている必要があります。「Adobe Flash Player」の設定につきましては、アドビシステムズのホームページをご覧ください。
Adobe「Flash Player ヘルプ」<https://helpx.adobe.com/jp/flash-player.html> (2016/4/5 アクセス)

（2）オンデマンド講義へのアクセス方法および視聴手順

- ①「manaba+R」のページへアクセスしてください。アクセス方法は以下のとおりです。
「教職員ポータル/Faculty & Staff portal System」→「manaba+R」
または 立命館大学トップページ内の「在学生の皆さまへ」→「学びのサポート」→「manaba+R」
- ②ログイン画面で「UserID」と「Password」を入力し、ログインしてください。
- ③「コース一覧」の「実践的 FD プログラム」オンデマンド講義【2016 以降新任】をクリックしてください。

The screenshot shows the manaba+R web application. At the top, there's a navigation bar with 'manaba+R' logo, user information (2016-04-08 (Fri)), and links for '設定' (Settings) and 'ログアウト' (Logout). Below the navigation bar, there's a 'マイページ' (My Page) section with tabs for 'コース' (Courses), 'メモ' (Memo), and '出席カード' (Attendance Card). The 'コース' tab is active, showing a list of courses under 'コース一覧'. A red box highlights the course '実践的FDプログラム オンデマンド講義【2016以降新任】'. A speech bubble points to this course with the text: '(例)「高等教育論Ⅰ」を受講する場合「実践的 FD プログラム」オンデマンド講義【2016 以降新任】をクリック'. Other courses listed include '実践的FDプログラム オンデマンド講義【2015以前新任】' and '実践的FDプログラム オンデマンド講義【受講生以外】'. On the right side, there's a '提出記録' (Submission Record) section showing '最近の提出記録はありません' (No recent submission records). Below that, there's a '早期利用申請について' (About Early Application) section with a QR code and a link to 'スマートフォンから課題提出' (Submit assignments from a smartphone). At the bottom, there's a 'コース管理' (Course Management) section with a link to 'コースの内容をコピー' (Copy course content).

④受講するコンテンツを選択してください。

manaba +R

2014-02-05 (Wed) | 設定 | ログアウト

マイページ コース 出席カード English

「実践的FDプログラム」オンデマンド講義【2016以降新任】

コース設定 担当教員: 2016

小テスト アンケート レポート プロジェクト 成績 (採点結果) 掲示板 コンテンツ (教材)

授業計画表 コースメンバーリスト

コースニュース

コースニュース追加

メンテナンスのお知らせ (2014.2.5) 2014-02-05

メンテナンスのお知らせ (2013.8.14) 2013-07-22

コースニュース一覧

スレッド (更新順)

教授学習理論Ⅱ:「教授・学習の理論と教育...」 1 2013-03-24

大学管理運営Ⅱ:「近年の大学改革の進展を...」 1 2013-03-24

教育評価論Ⅰ:「成績評価の意味と方法」 1 2013-03-24

教育方法論Ⅱ:「高等教育における授業技術」 1 2013-03-24

授業設計論Ⅰ:「大学の授業の設計」 1 2013-03-24

スレッド一覧

コンテンツ (更新順)

●必修講義 2014-02-05 14:18

○選択講義

○オプション講義 2014-02-05 13:49

資料集 2013-05-17 14:24

オプション講義【2... 2013-04-14 15:13

講義【2009-2011... 2013-04-14 15:12

(例)「●必修講義」をクリック

・コンテンツは「●必修講義」「○選択講義」「○オプション講義」に分かれています。
・資料集もご参照ください。

⑤右側に講義一覧が表示されます。受講したい講義を選択してください。

manaba +R

2014-02-05 (Wed) 岡本 詠子 | 設定 | ログアウト

マイページ コース 出席カード English

「実践的FDプログラム」オンデマンド講義【2016以降新任】

コース設定 担当教員: 2016

小テスト アンケート レポート プロジェクト 成績 (採点結果) 掲示板 コンテンツ (教材)

●必修講義 (2012年度以降用プログラム) 更新日時: 2014-02-05 14:18

高等教育論Ⅰ: Higher Education Theory I

テーマ: 現代の高等教育

到達目標

①日本及び世界の高等教育の状況を説明できる (知識)
②自らの大学の置かれた立場と今後の対応を考えることができる (知識)

動画

高等教育論Ⅰ VOD講義: Part1
高等教育論Ⅰ VOD講義: Part2
高等教育論Ⅰ VOD講義: Part3

English-dubbed ver. (2-Part.1)
English-dubbed ver. (2-Part.2)
English-dubbed ver. (2-Part.3)

講義資料

パワーポイント資料 (印刷用)
金子先生スライド0.pdf - 2013-01-22 14:48:19

02 PPT_Eng
02金子PPT_Eng.pdf - 2013-01-22 14:48:43

コンテンツ管理

●必修講義

高等教育論Ⅰ: Higher Education Theory I

教育方法論Ⅱ: Educational Methodology II

教育方法論Ⅴ

教育方法論Ⅰ: Educational Methodology I

心理学Ⅳ

立命館学Ⅰ: Ritsumeikan studies I

心理学Ⅰ: Psychology I

FD概論Ⅰ

(例)「高等教育論Ⅰ」をクリック

選択したページの講義一覧が表示されます。
※英語対応講義は、コンテンツ名も二言語表記されています。

⑥ご覧になりたい「動画」をクリックしてください。

URLが表示されますので、リンク先をクリックしてください。

manaba +R

2014-02-05 (Wed) | 設定 | ログアウト

マイページ | コース | 出席カード | English

「実践的FDプログラム」オンデマンド講義【2016以降新任】

コース設定 | 担当教員: 2016

小テスト | アンケート | レポート | プロジェクト | 成績 (採点結果) | 掲示板 | コンテンツ (教材)

必修講義 (2012年度以降用プログラム) 更新日時: 2014-02-05 14:18

高等教育論 I : Higher Education Theory I

テーマ: 現代の高等教育

到達目標

①日本及び世界の高等教育の状況を説明できる (知識)
②自らの大学の置かれた立場と今後の対応を考えることができる (知識)

動画

高等教育論 I VOD講義: Part1

※リンク先は、manaba+R公認のページではありません。よろしければクリックして下さい。
[http://www.ritsumeikai.ac.jp/ondemand/gp/re-2008jpn/...](http://www.ritsumeikai.ac.jp/ondemand/gp/re-2008jpn/)

English-dubbed ver. (2-Part.1)
English-dubbed ver. (2-Part.2)
English-dubbed ver. (2-Part.3)

コンテンツ管理

- 必修講義
 - 高等教育論 I : Higher Education Theory I
 - 教育方法論 II : Educational Methodology II
 - 教育方法論 V
 - 教育方法論 I : Educational Methodology I
 - 心理学 IV
 - 立命館学 I : Ritsumeikan studies I
 - 心理学 I : Psychology I
 - FD概論 I

+ ページ追加

(例)
「高等教育論 I VOD 講義 : Part1」をクリック
→表示されたURLをクリック

⑦別ウィンドウが開き、講義VTRが開始されます。

実践的FDプログラム

高等教育論 I

現代の高等教育

金子 元久
筑波大学
2014年度撮影

立命館大学教育開発推進機構 Institute for Teaching and Learning Ritsumeikan University

最初に戻る | 再生/一時停止 | ライン上でルーラーを動かすことにより、希望の場所に移動できます。 | 音声 入/切

⑧別の分野の講義を受講する場合は、『『実践的 FD プログラム』オンデマンド講義』をクリックし、コンテンツ選択のページに戻ってください。

manaba +R

2014-02-05 (Wed) | 設定 | ログアウト

マイページ コース 出席カード English

「実践的FDプログラム」オンデマンド講義【2016以降新任】

コース設定 担当教員: 2016

小テスト アンケート レポート プロジェクト 成績 (採点結果) 掲示板 コンテンツ (教材)

授業計画表 コースメンバーリスト

コースニュース

コースニュース追加

- メンテナンスのお知らせ (2014.2.5) 2014-02-05
- メンテナンスのお知らせ (2013.8.14) 2013-07-22

コースニュース一覧

スレッド (更新順)

- 教授学習理論Ⅱ:「教授・学習の理論と教育...」 1 2013-03-24
- 大学管理運営Ⅱ:「近年の大学改革の進展を...」 1 2013-03-24
- 教育評価論Ⅰ:「成績評価の意味と方法」 1 2013-03-24
- 教育方法論Ⅱ:「高等教育における授業技術」 1 2013-03-24
- 授業設計論Ⅰ:「大学の授業の設計」 1 2013-03-24

スレッド一覧

コンテンツ (更新順)

- 必修講義 2014-02-05 14:53
- オプション講義 2014-02-05 14:34
- 選択講義 2014-02-05 14:05
- 資料集 2013-05-17 14:24
- オプション講義【2... 2013-04-14 15:13
- 講義【2009～2011... 2013-04-14 15:12

コンテンツ一覧

(3) アンケート回答方法

オンデマンド講義視聴終了後、「アンケート」から受講された講義に関するアンケートに回答してください。

アンケート項目

- (1) 到達目標の達成度（到達目標を達成することができたと思いますか。）
 - ・ 講義によって到達目標が異なります。
 - ・ 以下の講座については本項目の設定がありません。
「立命館学Ⅱ」「立命館学Ⅲ」「立命館学Ⅳ」
- (2) 講義の難易度（講義内容の難易度は適切でしたか。）
- (3) 講義の実用性（講義内容は今後役立つと思いますか。）
- (4) 記述（以下のテーマを踏まえて、今回の講座に対するご意見や感想をお聞かせください。）

manaba+R へのアクセス

URL : <http://www.ritsumei.ac.jp/ct/>

または、立命館大学 HP → 在学生の皆さまへ → manaba+R

詳しいマニュアルを入手されたいときは

「manaba+R サポートページ」をご覧ください。

http://www.ritsumei.ac.jp/acd/mr/rio/ct_koukai/index.htm

6. ワークショップ（WS）

ワークショップは、受講者の実践的な教授技術の改善・向上を図ることや、教員と学生との授業内外でのコミュニケーションをより円滑にすることをねらいとしています。1つの講座は「講義」、「演習」、「質疑応答」の3つのパートから成り、全体で概ね120分の構成となっています。ワークショップは集合研修の形態で行い、各講座の資料はワークショップ開講時に全員に配布します。

オンデマンド講義も含めた受講計画を立て、計画的に受講してください。

【ワークショップの受講方法】

①ワークショップ開催の1ヶ月前を目処に、事務局より開催詳細（日時、場所等）をメールにてご案内します。

出席・欠席の連絡をお知らせください。

②ワークショップ当日は、会場で出欠確認を行います。

7. 教育コンサルテーション（CS）

教育コンサルテーションは、受講者の皆さんの日常の授業や学生とのコミュニケーションに関わる疑問や問題を、ともに解決することを目指し実施するものです。主に以下のような事柄について支援を行います。

- 授業の設計・実施・評価に関すること
- 学生とのコミュニケーションに関すること
- 上記以外の教育活動に関すること
- TP 作成の支援

教育コンサルタントとの相談内容は、相談者の同意が無い限り秘密厳守されますので安心して気軽に相談してください。また、相談時間は原則として30分～1時間程度ですが、状況に応じて対応します。

教育コンサルテーションは担当制で行います。全受講者を適宜グループに分け、原則として研修期間中は同じ教育コンサルタントが担当します。しかし、受講者から申し出があれば担当の教育コンサルタントを変更することができます。教育コンサルタント変更の申し出については、事務局にご連絡ください。また、その他プログラム全般に関わることについても事務局にお問い合わせください。

教育コンサルテーションの面談方法や日時は、各教育コンサルタントもしくは事務局からお知らせします。教育コンサルタントによっては、昼食会や懇親会などに担当グループの受講者をお誘いします。参加は自由ですが、交流の機会として、また受講者同志の意見交換の場として是非ご参加ください。

【教育コンサルタント】(50 音順)

薄井 道正 (教授)
研究室 : 衣笠キャンパス修学館 4F423 e-mail : usui-mic@fc.ritsumei.ac.jp / 内線 : 511-3423 / 外線 : 075-466-3221
沖 裕貴 (教授) * 2016 年度は学外研究中
研究室 : 衣笠キャンパス尚学館 3F846 e-mail : oki@fc.ritsumei.ac.jp / 内線 : 511-3846 / 外線 : 075-466-3152
河井 亨 (講師)
研究室 : 衣笠キャンパス至徳館 4 F 教務課 e-mail : kawai-t@fc.ritsumei.ac.jp / 内線 : 511-7154 / 外線 : 075-465-8304
川那部 隆司 (准教授)
研究室 : 衣笠キャンパス尚学館 1F814 e-mail : t-kawa@fc.ritsumei.ac.jp / 内線 : 511-3814 / 外線 : 075-466-3814
鳥居 朋子 (教授)
研究室 : 衣笠キャンパス尚学館 2F825 e-mail : torii@fc.ritsumei.ac.jp / 内線 : 511-3825 / 外線 : 075-466-3131
林 徳治 (教授)
研究室 : B K C キャンパスアクロス 5F583 e-mail : hayashi9@fc.ritsumei.ac.jp / 内線 : 515-7438 / 外線 : 077-561-4833
藤本 学 (准教授)
研究室 : 衣笠キャンパス尚学館 2F834 e-mail : fuzimoto@fc.ritsumei.ac.jp / 内線 : 511-3834 / 外線 : 075-466-3140
安岡 高志 (教授)
研究室 : 衣笠キャンパス尚学館 3F843 e-mail : yasuka@fc.ritsumei.ac.jp / 内線 : 511-3843 / 外線 : 075-466-3232
山岡 憲史 (教授)
研究室 : 衣笠キャンパス尚学館 3F849 e-mail : kyamaoka@fc.ritsumei.ac.jp / 内線 : 511-3849 / 外線 : 075-466-3441

【ティーチング・ポートフォリオ作成支援担当】

鳥居 朋子 (教授)
研究室 : 衣笠キャンパス尚学館 2F825 e-mail : torii@fc.ritsumei.ac.jp / 内線 : 511-3825 / 外線 : 075-466-3131
土岐 智賀子 (講師)
研究室 : 衣笠キャンパス至徳館 4 F 教務課 e-mail : cdoki@fc.ritsumei.ac.jp / 内線 : 511-7153 / 外線 : 075-465-8304

【プログラム事務局】

教務課 (衣笠キャンパス至徳館 4 階) 担当 : 古賀・山本 (内線 511-7150 / 外線 : 075-465-8304)

8. ティー칭・ポートフォリオの作成について

(1) ティー칭・ポートフォリオ（以下、TP）とは

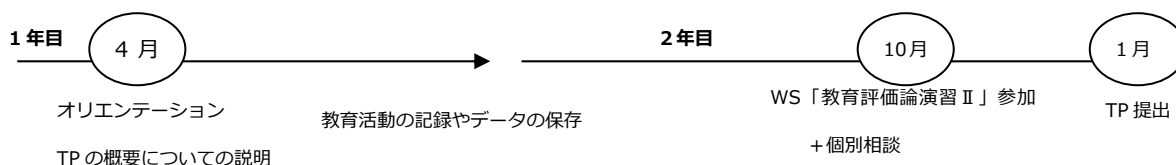
一般的に、TP とは「教育業績を記録する資料の集合であり、1 人の大学教員の教育活動について最も重要な成果の情報をまとめたものである」（セルディン、2007、3 頁）とされています。先生方が自らの教育実践に関する記録を保存することによって、自らの教育実践を振り返り、授業改善に活用することができるとともに、その改善と教育実践の記録を蓄積・更新し続けることもできます。さらには、今後、教員としての人生を歩む限り、先生方ご自身の研究に裏打ちされた確かな教育力を証明するものとして用いることが可能です。

(1) FD プログラムにおける TP 作成目的

- ①自らの教育活動の中で改善が必要な分野を自己省察するのに必要な仕組みとして用いるため
- ②FD プログラムを受講したことによる自分の教育活動への効果を記録としてまとめるため
- ③自分の教育の有効性に関する確かな根拠と具体的なデータを集め、将来的な昇格に関する審査などに備えるため

TP の作成は、世界的な動きとなっています。TP に含まれる項目は、世界中で共通のものも少なくありません。世界規模で大学教員が移動している現在では、特に、教員の力量を示すのに最も適切な判断材料の一つとして使われるようになっています。TP の作成を念頭において、教育活動の記録やデータの保存を計画的に進めるようにしてください。

(2) TP 作成の流れ（目安）



TP 作成の個別支援について

TP 作成にあたり、随時個別相談を受付けます。各先生の教育の理念を改めて明確化する作業をはじめとし、どのような資料を集めるのがよいのか、資料をどのように提示すればよいのかなどの具体的な手順など、TP 作成支援担当者または教育コンサルタントが個別に対応します。相談内容は**ご本人の同意がない限り公開しません**ので、安心してご相談ください。

(3) 資料

資料 1：TP の基本構成

資料 2：ボトムアップ法による演習シート

資料 3：ティーチング・ポートフォリオの作成例

(4) 引用・参考文献

1. セルディン、ピーター『大学教育を変える教育業績記録』大学評価・学位授与機構監訳、栗田佳代子訳、玉川大学出版部、2007 年。
2. 土持ゲーリー法一『ティーチング・ポートフォリオ－授業改善の秘訣』東信堂、2007 年。
3. 栗田佳代子、「日本におけるティーチング・ポートフォリオの可能性と課題-ワークショップから得られた知見と展望-」、大学評価・学位授与機構、2009 年 3 月。

資料 1：TP の基本構成

表紙

目次

教育活動の範囲と責任

教育理念（なぜやっているか：自身の教育信念）

教育方法（どのようにやっているか）

成果（どうだったか）

今後の目標（これからどうするか）

その他、「研究との関連」「改善の工夫」 など

エビデンス（根拠となる資料）

資料 2：ボトムアップ法による演習シート

この部分には、あなたの教育
理念を記述します。理念は
一つとは限りません。

MiniWork Sheet

(例) 教育者として心がけていること、工夫している
こと、大切だと考えて実践していることなど (A)
※できるだけ多く書き出しましょう。

この部分には、あなたが
日頃行っている教育活動
を具体的に記述します。

(例) シラバス、配布資料、講義ノート、学生か
らのメールや手紙、パワーポイント資料、 (B)
学生からの提出レポート、授業の写真、試験問題

この部分には (A) の行動
の証拠となりそうな資料
を記述します。

(例) 授業評価の項目／コメント、優秀なレポート、
学生の進路、学生からのメール／手紙、 (C)
学生の研究発表、同僚教員や上司の評価

この部分には (A) の行動
から得られる成果の証拠
を考えて記述します。

私の専門は です。

[注] 栗田佳代子氏による立命館大学での新任教員を対象としたティーチング・ポートフォリオ研修会資料より抜粋
(2009/11/14 開催)

ティーチング・ポートフォリオ

鳥居 朋子
立命館大学教育開発推進機構
2010 年 2 月 24 日作成

目 次

1. 教育活動の範囲および責任
2. 教育の理念
 - (1) 学び手である学生に関する教育理念
 - (2) 教員としての自分のあり方に関する理念
3. 授業の方法
 - (1) 授業で伝えたいことがら
 - (2) 授業方法
 - (3) 学生とのコミュニケーション
 - (4) 自分の専門分野の授業への反映
4. 成果（省察）
 - (1) 理念との整合性
 - (2) 授業方法
 - (3) 学生とのコミュニケーション
 - (4) 自分の専門分野の授業への反映
5. 授業改善への努力
 - (1) 教材開発
 - (2) 授業改善のための学内外の学習会や講演会等への参加
 - (3) コンサルテーションの利用
 - (4) その他
6. 将来の目標（中・長期）
 - (1) 長期目標：どのような教育を行いたい
 - (2) 短期目標：立命館大学において実現したいこと
7. 効果的な教育活動を証明する証拠の一覧
 - A 授業シラバス
 - B 授業における教材および配布資料
 - C 授業における学生の成果物
 - D 学生とのコミュニケーション記録
 - E 授業アンケートの集計結果
 - F 教授法や FD に関する研究開発物一覧
 - G 他大学における研修の修了証（写真）
 - H 委員会関係資料
 - I その他の資料

はじめに

私は、これまでの勤務校である名古屋大学高等教育研究センターと鹿児島大学教育学部における教育研究にかかわる職務経験を経て、2009年4月に立命館大学教育開発推進機構に着任しました。2009年度は、まさに立命館大学での教育活動をスタートさせる起点の年に相当します。本ティーチング・ポートフォリオを通して、今後の教育活動のビジョンを明らかにしていきたいと考えます。

1. 教育活動の範囲および責任

2009年度春学期は、学部生対象の4科目の講義を担当し、教育開発推進機構の教員として教育活動に関わる業務に従事しました。

2009年度春学期担当授業（詳細は添付資料Aの授業シラバスを参照のこと）	
1	科目・クラス名：現代の教育（E） 概要：「現代社会における教育の動向に注目し、その問題状況や解決に向けた方策について理解を深め、受講生が自分自身の意見をつくり上げること」を目的とし、「現代の教育の諸相」と題して、児童・生徒の学び、学校環境の変動、高等教育の国際的な動向、おとなの学び等の個別テーマに沿って解説し、受講生各自の問題意識を形づくっていきました。多人数のクラスになったため、学生たちは講義を聴いて自分の意見を個々に文章にまとめる学習活動が中心となりました。 規模：285名 回生（学部）：1～4回生（経済）
2	科目・クラス名：ピア・サポート論（GA） 概要：「ピア・サポートの理念を知り、実践に活用する態度を身につける」を目的とし、「本学の理念・目的やオリター制度、ES、TA制度の歴史、目的、仕組みを説明することができる。」「前後期青年期の特徴や最近の生徒・学生の思考・行動様式について説明することができる。」「授業を行う際に利用できる指導方術についてその要点を説明することができる。」「ピア・サポートに意欲を持ち、自ら学ぶ態度を持つ。」「ピア・サポートを通して得た経験を、インターンシップやボランティアを初め他のピア・サポートやサービス・ラーニングに生かそうとする意欲を持つ。」「適切なコミュニケーションをとるための技術を持ち、必要な場面で活用することができる。」「集団を指導する際に有効な指導方略、指導方術を修得し、適切かつ効果的に利用することができる。」を具体的な到達目標としました。具体的に、本学における学生相互の学び合いの仕組みの目的、オリター制度やTA、ES制度の歴史等に関する基本的知識の習得、指導・支援を行う学生の要求と特徴をつかむための基本的な青年期発達理論の学習、学修指導に関する教員との分担の方法やチーム・ティーチング、ファシリテーション等の教育方法の習得、さらにコミュニケーション能力を育成するさまざまなトレーニング等を行い、講義だけでなくグループワークを中心とした演習を盛り込みました。 規模：43名 回生（学部）：2～4回生（法・産業社会・国際関係・政策科学・文・映像）
3	科目・クラス名：教養ゼミナール(20) 概要：「青年期にあたる大学生の発達に関する基本的な理論や具体的な事例の検討を通じて、受講生自身が大学生生活を設計するための視点を育むこと」を目的とし、「人間の発達に関する基本的な理論や現代の大学生を取り巻く状況を理解し、青年期に固有な発達課題について説明できる。」「大学生の学習・研究の基本的方法や大学の特性を理解し、自分なりの知的探求の課題を提示できる。」「大学生の発達にかかわるテーマについて、調べる・考える・書く・発表する・議論する・ITを活用する等の基礎的学習スキルを身につける。」「大学での学びのルールを尊重し、多様（他分野・異年齢）な学生で構成される集団のなかで他者を理解し、共に学びあう雰囲気醸成に貢献する。」を到達目標としました。具体的には、青年期の発達課題や、映画等に見る現代の青年・大学生像、大学の諸機能についての解説を通して、受講生が自らの存在を発達の「可能態」として捉え、主体的に学習に取り組むための視点を培っていきました。また、ミニ演習や小レポートの作成によって、大学で求められる能動的な学びのスタイルや思考様式の獲得を促しました。 規模：20名 回生（学部）：1～4回生（産業社会・国際関係・文・映像）
4	科目・クラス名：アスリートのアカデミック・スキルズ（B2）

	概要：「受講生の各学部における教養や専門の授業を受講する上で基礎となる、論理的思考力、批判的思考力、コミュニケーション技術、プレゼンテーション技術、そしてライティング技能を中心とした基礎的なアカデミック・スキルズの育成を図る」を目的とし、「明晰かつ批判的に思考することができる（思考・判断）。」「円満に意思の疎通を図ることができる（技能）。」「論理的に書くことができる（技能）。」「論理的かつ生産的に議論し、発表することができる（技能）。」「学問と学問をする仲間に対し、畏敬の念を持ち、自らもそれに参加しようとする意欲を持つ（態度）。」を到達目標としました。私を含めた 6 人の教員が共通シラバスを用い、少人数クラス（40 名×6 クラス＝240 名：衣笠・BKC の各キャンパス 3 クラス）で開講し、下記知識・技能・態度のきめ細やかな指導を心がけました。 規模：37 名 回生（学部）：1 回生（経済・経営・理工・情報理工・生命科学）
その他	
	・立命館大学における新任教員を対象とした教員研修の企画、実施に参画しています。 ・鹿児島大学大学院教育学研究科で集中講義（教育マネジメント特論、学校経営の基礎と応用）を担当しました（添付資料 A：授業シラバス）。 ・大学コンソーシアム京都で、大学の教職員の資質向上を目指す SD フォーラム「大学の教学マネジメントにおける IR」の講師を務めました（添付資料 I：講演資料）。

2. 教育の理念

本学教育開発推進機構が推奨する実践的 FD プログラムにおける中心的な理念であるアクティブ・ラーニングの推進をめざして、私が日ごろの教育実践で最も大切にしている指導の理念は、「学生が主体的にものを考え、授業内外での学習へに取り組むことを奨励する」というものです。これは、私の立命館大学における授業での姿勢や態度を支える教育理念の一つに相当します。

（1）学び手である学生に関する教育理念

比較的、少人数教育が可能な国立大学や小規模の公・私立大学とは環境条件を異にする大規模総合私立大学である立命館大学では、必然的に多人数の講義形式による授業に拠らざるを得ません。そうした条件においても、学生のアクティブ・ラーニングを推進するにはいかなる戦略や目的、方法、教員としての学生への働きかけが有効であるかどうかを常に思考しながら指導にあたることを、大学教員である私自身の成長課題のひとつに置いています。

具体的な働きかけとしては、担当授業のカリキュラム上の位置づけを理解し、学生を主体とした授業目標を設定した上で、授業目標が達成できるような授業設計を行うことです。その際、重視すべき点として、ただ漫然と 90 分という授業時間を過ごすのではなく、学生が自分の頭で思考するように促す「しかけ」を盛り込む必要があります。このことは、私が掲げる教育理念の「学生が主体的にもの考える」という部分に対応するはたらきかけです。たとえば、毎回の授業の冒頭で何らかの「問い」を学生たちに投げかけ、授業の最後にその「問い」に関連するようなテーマのミニペーパーを課します（添付資料 C：毎回のミニペーパーの抜粋）。これにより、学生は教員が解説することがらやデータ、情報を自分の頭の中の「問い」に照らしながら批判的に検討し、学習を深めることが可能となります。

また、授業内外の具体的な教育の場面においては、学生に対する寛容さや愛情を根底とする指導を惜しまないことも重視しています。概して、大規模大学における多人数授業では、教員と学生や学生同士の双方向的な関係が断たれ、学生の学習行動が個別的になり疎外感を得やすくなります。そうした疎外感を軽減するために、教授法や意見交換、学生の質問に対するフィードバックのあり方等を工夫することによって、学生ひとり一人の成長発達が可能になるような授業実践を追求します。これらのことは、「授業内外での学習に取り組むことを奨励する」という教育理念を支えるはたらきかけです。

（2）教員としての自分のあり方に関する理念

なおかつ、ユニバーサルアクセス化した現代の大学においては、とかく学習動機を失いがちな学生たちに対して、粘り強さを持って接し、学習への興味関心を向上させることも私にとっての重要な課題です。何らかの障がいを持った学生に対し可能な限り配慮することも惜しみません。たとえば、色覚異常の学生に配慮し、スライドや板書等では赤色や緑色の使用を可能な限り避けました。これらの配慮についてはシラバスにも記載し、支援が必要な学生の申し出に柔軟に対応することを周知しています（添付資料 A：授業シラバス）。

あわせて、教育学や教授方法にかかわる研究を基礎に得た知見を、その領域の初学者にとっても理解可能な知識に変換

し、学生たちにわかりやすく伝えていくことも重視しています。この点にかかわっては、立命館大学の「学びのコミュニティ」の成長に貢献する教育開発支援センターの所属教員として、国内外のすぐれた指導方法の研究や実践に基づいた知見を採り入れ、自分自身の授業での実践をふまえながら、立命館大学のピアや新任教員の授業改善に資するロールモデルをめざしていきたいと考えています。

さらに、学生の学習成果や授業評価等の根拠に基づいた授業改善を実践することも私の教育理念の一つに位置づけられます。いわば、自分自身の教育実践において「PDCA サイクル」、すなわち、授業の目標・計画の策定－授業の実施－授業の成果や課題のチェック－次期授業計画への反映といったサイクルをきちんとまわすことです。とりわけ、立命館大学への着任初年度である 2009 年度春学期の授業に対する省察を基に、達成された目標と積み残された課題を明らかにしていきたいと考えています。

3. 授業の方法

(1) 授業で伝えたいことから

2009 年度春学期に担当した授業のうちでも、自分の理念が一番反映されており、本ティーチング・ポートフォリオで省察する授業は、「現代の教育」です。なぜなら、下記「2. 教育の理念」で掲げたように、私が重視している理念を約 300 人の多人数授業で追求するという、自分にとっても挑戦的な課題に満ちた機会だったからです。なおかつ、教育学の初学者に対して教育をめぐる今日的問題を説くという、私自身が初心に返りあらためて教育学への視点を捉えなおす貴重な機会だったと思います。

本授業では、大学 1 回生から 4 回生までの学生に対し、人間の発達課題等の教育原理にかかわる問題から、学校教育および大学教育、さらにはおとなの学び（成人教育）にわたる問題まで、広い範囲を取り扱いました。具体的な授業の達成目標は、以下の 3 つです。

- ・現代の教育をめぐる諸問題について、その背景や原因、重要な論点を指摘できる。
- ・現代の教育をめぐる諸問題について、教育学的な視点に基づき、解決法や対処すべき課題に関して自らの意見を論述できる。
- ・教育に関して興味関心を持ち主体的に問いを立て、他者の意見を尊重し、考える態度を示す。

(2) 授業方法

毎回の授業は講義を基本とし、授業の終盤に課すミニペーパーは必修としました（添付資料 C：全 15 回）。さらに、青年期の発達課題や大学での学びについての授業では、学生自身の自己受容やアイデンティティ形成の度合い等を、測定尺度を用いて分析するミニ演習の時間を持ちました（添付資料 B：授業中のミニ演習課題）。グループ演習の機会は多くありませんでしたが、今後は学生のアクティブ・ラーニングを推進する上で、学生のレディネス（前提知識や興味関心等の学習への準備状況）を見極めながら段階的に取り入れていきたいと考えています。

(3) 学生とのコミュニケーション

毎回授業終了時に提出されるミニペーパーのなかから、全体にフィードバックすべき論点が書かれたものを選び、次の授業の冒頭で口頭によって紹介しました。また、ミニペーパーの余白に書かれた質問や要望、授業時間外に口頭あるいはメールで伝えられた質問や要望についても、内容を吟味したうえで、速やかな対応を心掛けました。さらに、ES（Educational Supporter：本学独自システムで、学部生の授業補助者）を通じて寄せられた質問や要望についても同様に対応しました。

(4) 自分の専門分野の授業への反映

私の専門分野は、教育経営学、高等教育マネジメントであり、現在進めている研究領域は、大学の組織運営、マネジメント、教授・学習の方法等です。広く教育を営む組織の意思決定や運営のあり方について研究的関心を持っていますが、とりわけ高等教育機関における質保証の問題や、学習成果の向上にむけたシステムづくりを追究しています。

上述した私の専門分野や研究領域および問題意識については、以下のような方法で授業に反映しています。第一に、教育学の基礎的な今日的問題を単に表層的に紹介するのではなく、それらの今日的問題がいかに構造的に結びあい、なおかつ青年期の発達課題に向き合う大学生「自身」の成長にどのように作用しているのかを考えさせるような授業設計をしました。この点は、トピックの選択、配列に反映されています（添付資料 B：各回のパワーポイントスライド）。

第二に、教育を営む組織への視点を強調し、初等・中等教育機関、高等教育機関、企業等の組織において、どのように学習・教授活動が展開されているのかについての理解を深めるような授業を実施しました。授業の終盤では、キャリア形成やおとなの学びについて触れ、学生自身が今後の学びのあり方について展望する機会を提供しました。

4. 成果（省察）

（1）理念との整合性

概ね、教育の理念と整合した授業が実施されたと自己評価しています。これらは、授業の第13週に実施した学生による授業アンケートの結果にも反映されています（添付資料E：授業アンケートの集計結果）。とくに、「この授業はあなたの学びと成長にとって、どの程度役立ちましたか」という設問（4件法）に対し、約83%の学生が「十分役立った」、「役立った」という肯定的な回答を示しました（回答総数168名）。さらに、自分の頭で考えたアイデアをまとめ、文章として論理的に表現することの面白さ、楽しさに目覚めた学生からは、期末レポートへのコメントを希望するメールが届けられました（添付資料D：学生からのメール記録）。この学生は、本学に不本意入学（他大学が第1志望）したため、大学での目的を模索していた1回生でしたが、私やESからのアドバイスを受け、前期セメスターの途中からは上回生の専門ゼミに自主的に参加するほど、目覚ましい成長をみせた一人でした。アクティブ・ラーニングを通じて、学生自身の学びの方向づけができた好例だと認識しています。

（2）授業方法

多人数授業ということもあり、座席の近い受講生同士の意見交換や個人作業によるミニ演習は実施しましたが、長時間のグループ演習は取り入れませんでした。アクティブ・ラーニングを促進するために、次期の授業では部分的に試行したいと考えていますが、そのためには、私自身のグループワークの指導技術を磨いたり、必要な知識を獲得することが課題になると思っています。また、授業アンケートの回答にもあったように（添付資料E：授業アンケートの集計結果）、「パワーポイントの速度がはやい」という意見もあり、今後は1時間の授業内容の精査とともに、教材（スライド）の精選を行う必要があると認識しています。また、ユニバーサルアクセスの問題にかかわっては、スライドや資料で使用する文字の色には原則的に赤や緑は用いず、色弱の学生への配慮を行いました。

（3）学生とのコミュニケーション

形成的評価の意図もあった毎回の授業のミニペーパーですが、学生との双方向的なコミュニケーションのツールとしても活用しました。ミニペーパーに書かれた質問や要望については、内容を精査した上で、学生に個別に返したり、クラス全体にフィードバックし、丁寧な対応に努めました。これにより、多人数講義でしたが、ある程度「風通し」のよい雰囲気クラスのづくりができなのではないかと感じています。授業アンケートでも、「この授業はとても役に立つと思う。先生は授業内容ばかりを話すだけではなく、学生とのコミュニケーションもよくできていた」という記述が得られ、受講生たちも同様の感を持っていたことがうかがえます（添付資料E：授業アンケートの集計結果）。

（4）自分の専門分野の授業への反映

下記5の「（1）教材開発」に記載したように、これまでの高等教育研究や教授・学習の開発にかかわる職務を通じて培った授業設計のスキルを活用しました。とくに、インストラクショナル・デザイン（ID）に基づく授業設計は奏功しました。最終回の授業で、授業の設計プロセスを明かした「メイキング・オブ現代の教育」を解説しました。授業設計および教材開発の手法の解説をふまえて紹介したところ、学生たちからは「授業の背景にそのようなしっかりした設計思想があったとは驚いた」「しっかりとした設計に基づく授業だということがよくわかった。」という反応が示されました（添付資料C：ミニペーパー）。

5. 授業改善への努力

（1）教材開発

IDの手法を活用し、本授業の設計を次の順序で行いました。①まず、学生たちが本授業での学習が終わった時に何ができるようになっているかを明示するために、「学習成果のプロフィール」のリストアップを行いました。これは、主語を学生にし、具体的な行動目標で挙げていく作業です。たとえば、「教授・学習過程の基礎的な理論について説明できる。」「学習意欲を向上するための指導工夫のポイントを説明できる。」「学校の授業をよりよくする方策について興味を持ち、自分なりの考えを示すことができる。」のような具体的な行動目標を思いつくまリストアップしていきしました。②15回すべての授業で50～60個ほどの学習成果のプロフィールを挙げ、次に、関連性の高いプロフィールのかたまりごとに束ねる作業を行い、その後配列（学習順序）を決めました。③授業の各回の到達目標が定まった後で、それぞれの到達目標に適した教材の開発を行いました。④授業の到達目標と整合性をつけながら、学生の学修の深化に資するようなコンテンツの精選と配列、パワーポイントファイルの作成と補足資料の作成を実施しました。

さらに、とくに現代の大学生に親しみのある映像資料やインターネットで配信されている動画教材等を効果的に活用し、

とかく抽象的になりがちな教育をめぐる論点に具体性を添える工夫を凝らしました（添付資料 B：動画教材のタイトルや URL 等）。

これらの ID の手法に基づく授業設計および教材開発のスキルは、私が名古屋大学高等教育研究センターに勤務していた時に同僚らとともに獲得したものです。先行研究や実績に基づき、『プロフェッショナルスクールのための授業設計ハンドブック』（添付資料 F：URL）を共同開発した経験も私の授業および教材開発のスキル向上にきわめて有効でした。

（2）授業改善のための学内外の学習会や講演会等への参加

立命館大学に着任する以前は、かつての職場である名古屋大学高等教育研究センターにおいて FD 研修やセミナーの企画に携わり、授業改善支援にあたる専門職としての経験を積みました。職務を通じて、新任教員対象の『ティーチングティップス』、学生のための『スタディティップス』の開発、カリキュラム改革に資するためのハンドブック『ティップス先生のカリキュラムデザイン』等の開発・提供を行う中で、私自身の授業改善にかかわる知識やスキルも段階的に向上してきたと思います（添付資料 F：研究開発物の表紙および公開 URL）。あわせて、2006 年秋には職場派遣による海外の大学における FD 研修への参加の機会にも恵まれ、オーストラリア・シドニー大学の新任教員研修（3 日間のプログラム）を経験しました。同研修では、最後の演習課題（マイクロティーチング）の後に修了証を授与されたことが大きな励みになりました（添付資料 G：修了証の写真）。

その後の職場である鹿児島大学教育学部では、いわゆる「教員養成」を主たる目的とする学部特性から、「教えることのプロ集団」としての同僚教員から多くのことを学びました。とりわけ、初等・中等教育における授業設計や教授法の開発研究から、高等教育における授業改善への示唆を得たことは私の大学教員としてのキャリアにとって大きな財産だったと思います。さらに、所属する日本高等教育学会や大学教育学会における実践研究報告の知見からも多くを学びました。

立命館大学に着任後は、所属する教育開発推進機構が提供する新任教員研修の講師を務めるなか（「成績評価の方法」VOD 講師等）で、教授・学習に関する新たな気づきや課題の発見を繰り返しています。また、同機構が招聘する学外の先生方から知見をいただき、自己研鑽にも励んでいます。とくに、このティーチング・ポートフォリオの作成にあたって、大学評価・学位授与機構の栗田佳代子先生による講義およびワークショップ（2009 年 11 月からは、ティーチング・ポートフォリオの意義や目的、具体的な作成プロセスについて多くを学びました。今後は、学内でのティーチング・ポートフォリオ作成のメンターとして自己成長するために、獲得した知識をいかに自分のものにするかが大きな課題のひとつです。

（3）コンサルテーションの利用

とくに私自身のメンターを持っているわけではありませんが、同僚である教育開発支援センターの教員とは折々に相談をしています。たとえば、ティーチング・ポートフォリオの作成にかかわっては、井上史子講師のお力とお知恵をお借りしながら進めています。また、授業の設計や運営方法については、沖裕貴教授の豊かなご経験に基づくアドバイスを仰いでいます。江原武一教授からは、より広い意味での教授・学習の環境整備の問題や、評価システムの問題等について助言をいただいています。さらに、国立大学と比較して、教員の担当コマ数も多く、ひとつひとつのクラス規模も大きくなりがちな大規模私立大学においては、教員自身の教育マネジメントをいかにうまく行うかが大きな鍵になると実感します。こうした悩みに関しては、安岡高志センター長から、教育や研究、管理業務といった大学教員の職務バランス等について、大きな視点からアドバイスを頂戴しています。その他、様々な同僚教員や事務職員からの支援を受け、いわば、大学教員固有の同僚性（Collegiality）に根差した「ゆるやかなコンサルテーションシステム」とでも呼ぶべき環境に恵まれている状況にあると考えています。

（4）その他

授業にかかわる教育関連の業務や委員会業務としては、立命館大学において、現在、「学生の学びの実態調査」の開発、授業アンケート検討 WG、学習図書館検討委員会、新中期計画第 3 委員会（包括的学生支援方策と体制）等に携わっています（添付資料 H：委員会資料等）。それぞれ目的および役割が異なる委員会ではありますが、総じて立命館大学の「学びのコミュニティ」の成長に向けて、教学にかかわる条件整備や内部質保証システムの構築に関する事項の検討に参画していると認識しています（添付資料 H：委員会記録）。この他、公式の委員会ではなくとも、一般教員や学部執行部の教員および学園役員等から、高等教育マネジメントにかかわる専門的な知見や意見を求められ、応じることもあります。

6. 将来の目標（中・長期）

（1）長期目標：どのような教育を行いたい。

今期の授業を終了した時点で出された学生からの要望として、自分の視野を広げるために諸外国の教育問題や教育事情

を取り上げて欲しいという声がありました。私が現在担当している授業のほとんどは一般教育（教養系）科目ですが、他にもなく、学生自身の「座標系」を平面的にも空間的にも広げていくことをいかにたすけるかに一般教育の主要な意義があると自覚しています。したがって、学生たちの「座標系」をのびのびと広げていくような教育を実践することが私の長期目標のひとつです。その意味では、学生からの要望にあったように、諸外国の教育問題（高等教育にとどまらず、初等・中等教育も視野に入れて）を見渡せるようなスケールの大きな教育を実現したいと考えています。

また、現在は自分自身の専門領域と直接的に関連する授業科目は担当していませんが、長期的には、機会があれば私の専門領域に学術的関心を持つ後学者を育成したいという思いがあります。これは、カリキュラム編成や担当教員配置の問題ともかかわりますので、私の一存で設定できる目標ではありませんが、本学に在籍する約3万人の学士課程学生のなかから、私の授業を通じて高等教育マネジメントや教授・学習の方法にアカデミックな興味を抱く学生がひとりでも多く現れることが願いです。

（２）短期目標：立命館大学において実現したいこと

今後3年間は、現在担当している授業科目の安定的運営および洗練化を図ることが目標です。毎年変わる受講生の特性を的確に把握しながら、個々の授業をたいせつに展開し、学生の成長をみきわめたいと思います。その後、条件さえ許せば、可能な限り丁寧な授業のブラッシュアップを実現したいと考えています。具体的には、学生の実態（既得知識や問題関心など）の調査をふまえながら、授業で取り上げるトピックの精査とともに、内容に最適な教材開発や教授法を選択することが相当します。これは、授業のマイナーチェンジではなく、内容や教授法の抜本的な見直しを行うために必要な時間だと考えます。とかく大規模私立大学の学生は基礎学力、学習意欲、学習動機等が多様だと言われますが、そのような学生集団にとって有益な授業の「鮮度」をいかに保持するかは、重要な課題だと認識しています。私自身が今後のキャリアを重ねていくなかで、研究と教育、管理業務等の職務のバランスをうまく図るためには、個人の努力を超えたところでの組織的な支援体制が不可欠だと考えます。大学の教学マネジメントの課題として、大学執行部の深い理解と具体的な政策の実行を希望するところですし、なおかつ、そのような組織的な支援体制のあり方については、翻って、私の高等教育マネジメントの研究テーマとも接合するものです。

このように、私自身の専門領域の固有性ともあいまって、授業を通じて、教育と研究の一体的な追究を継続していくことが短期目標の根底にあると考えています。

7. 効果的な教育活動を証明する証拠の一覧（ファイルに添付する資料目録）

A 授業シラバス

- ・「現代の教育(E)」
- ・「ピアサポート論(GA)」
- ・「アスリートのためのアカデミックスキルズ(B2)」
- ・「教養ゼミナール(20)」
- ・「教育マネジメント特論」（集中講義）
- ・「学校経営の基礎と応用」（集中講義）

B 授業における教材および配布資料

C 授業における学生の成果物

- ・毎回の授業におけるミニペーパー（15回分）
- ・授業プロセスでの成果物（課題提出物）
- ・期末レポート試験

D 学生とのコミュニケーション記録

- ・個別の学習相談、添削依頼等の学生からのメール記録

E 授業アンケートの集計結果

F 教授法やFDに関する研究開発物一覧

- ・表紙
- ・公開URL

G 他大学における研修の修了証（写真）

H 委員会関係資料

I その他の資料

以上

9. コース・ポートフォリオの作成について

(1) コース・ポートフォリオ（以下、CP）とは

CPとは、「科目の担当教員がその「デザイン」「実施」「学生の学び」について記述し、それらに振り返りを加えながら作成していくもの」（酒井、2015、213 頁）です。ティーチング・ポートフォリオが先生方の教育実践の全般について振り返りをし、記述したものであるのに対し、CPは、担当している科目の中から1科目（コース、多くの場合15回の授業からなる）を選択して頂き、その科目の教育活動に限定して、省察をしていただくものです。選択された一つの科目について、授業デザイン、教授方法、学生の学びに関して、それぞれ記述と分析をしていただきます。その際、本プログラムでは、CPを作成する過程における受講生や教育開発推進機構教員によるピア・レビューを通して、より深い省察をしていただくことを支援します。

CPの作成は、新任の先生方が日々の教育実践を行いながら、本プログラムの到達目標（適切性、妥当性、有効性を省察し、改善できる基礎的な能力）を修得する）に対応して、「省察を踏まえた改善（教育活動のPDCA）」をしていただくための手段になるものと位置づけています。

また、十分な省察を経て完成されたCPは、教員個々人の優れた教育実践のレポートとして活用されることも期待されています。

(2) FDプログラムにおけるCP作成目的

- ①一つの科目（コース）について省察することにより、授業のデザイン、教授方法の見直しや改善を図る力量を向上させるため
- ②FDプログラムを受講したことによる自分の教育活動への効果を記録としてまとめるため
- ③ピア・レビューを通じてプログラムの参加者間で優れた教育実践を共有するため

(3) CP作成の日程と作成支援

CP作成の説明（一部作成を含む）ならびにピア・レビューは、2回のワークショップ（「教育評価論演習ⅢA」（2016年度：4月23日）、「教育評価論演習ⅢB」（同：8月1日）と、ランチタイムFD等で行います。CPのテンプレートはmanaba+Rからダウンロードできるようにいたします。またワークショップで配布した資料もmanaba+Rから入手できるようにいたしますので、ワークショップにご参加いただけない方もご活用ください。

(4) CPの基本構成

- ・コースの情報（コースの概要、受講生の到達目標、コースの基本情報：受講生数・回生等、成績評価方法、教材など）
- ・コースの振り返り（コース全体の振り返り、授業アンケートと関連づけた振り返り、他者の意見をふまえた振り返り、授業の振り返りなど）
- ・授業改善に向けた取組み

(5) 特記事項

CPを作成する科目(コース)は、ご自身の教育理念が最も反映されやすいものを選択されることを推奨いたします。

(6) 引用・参考文献

1. 酒井博之「コースポートフォリオとはーその概要とねらい」『看護教育』2015年3月号、医学書院、212～219頁

作成日	年	月	日
氏名：			
所属学部・機関：			
Part 1 . コースの情報			
コース名：			
コースの概要 （シラバスの「授業の概要と方法」を引き写し（コピー＆ペースト）てください）			
コースの基本情報（ ☐ がある場合は ☐ 内にチェックしてください、複数チェック可） （受講者数・回生・専攻の記入は、受講生が確定してから行ってください）			
科目の種類 ☐ 専門科目、 ☐ 教養科目、 ☐ 外国語、 ☐ 教職科目			
受講生の特性 受講者数 名 回生：学部 ☐ 1 回生、 ☐ 2 回生、 ☐ 3 回生、 ☐ 4 回生、 ☐ 5 回生以上 大学院 ☐ M1、 ☐ M2、 ☐ D1 以上 専攻： ☐ 法、 ☐ 産社、 ☐ 国関、 ☐ 文、 ☐ 映像、 ☐ 経済、 ☐ スポ健、 ☐ 理工、 ☐ 情理、 ☐ 生命、 ☐ 薬、 ☐ 経営、 ☐ 政策、 ☐ 総合心理 大学院（　　　　　　　　　　　）			
曜日と時限 曜日、 時限			
その他特記事項（例．複数担当者制である、視覚障がい者が含まれるなど）を書いてください。また、前任者からの引継ぎがある方はその内容も記してください。			
受講生の到達目標 （シラバスの「受講生の到達目標」を引き写し（コピー＆ペースト）てください）			
成績評価方法			
定期試験（筆記）	%		
レポート試験 （統一締切日を締切とするレポート）	%		
上記以外の試験・レポート、平常点評価 （日常的な授業における取組状況の評価）	%		

教授方法（複数チェック可）

授業スタイル

□講義、□演習、□実験

□その他、また具体的に工夫したこと

教材（複数チェック可）

☐教科書、☐自作の配布資料、☐文献、☐映像資料

☐ その他 ()

受講生に求める課外学習活動

(シラバスの「授業外学習の指示」を引き写し(コピー＆ペースト)してください)

Part2. コース（科目）のリフレクション

(1) ヨース全体のリフレクション

①コース全体（全 15 回の授業、授業外の指導も含む）を通して工夫していること、力を入れていることを具体的に書いてください。

②授業アンケートと関連付けたリフレクション

授業アンケートの結果を書き写してください（クラス平均／分野平均）。

学習意欲の促進 (/) 能動的学習度 (/)

学び役立ち度 (/) 授業外学習時間 (/)

③他者の意見をふまえたリフレクション

(2) 個々の授業のリフレクション

①うまかったと思う授業について

うまくいったと思う授業について、どのような点がうまくいったか、具体的なことがらとその理由をあげて記してください（授業の展開やタイムスケジュールをお書き頂いても結構です）。

②うまういかなかったと思う授業について

うまくいかなかったと思う授業について、どのような点がうまくいかなかったか、具体的なことがらとその理由をあげて記してください（授業の展開やタイムスケジュールをお書き頂いても結構です）。

Part 3. 授業改善に向けた取組み

①コース中に取り組んだこと

②コース終了後にやりたいこと（やったこと）

10. 新任教員教育推進費活用実践報告書のご提出について

着任後 2 年間に集中的に教育力向上に向けた研鑽を図る期間と位置づけ、新規任用専任教員（任期制の教授・准教授、講師、助教を対象とする。但し、他大学・短期大学・高等専門学校で専任教員歴 3 年以上を有する者を除く。）を対象に本学の研修等への参加および研鑽を奨励することを目的として、「新任教員教育推進費」（年額 15 万円、着任後 2 年間）を支給します。

活動実績として、本プログラムの到達目標（「適切性、妥当性、有効性を省察し、改善できる基礎的な能力」を修得する）に対応して、日ごろの教育活動について「省察（リフレクション）を踏まえた改善（教育活動の PDCA）」をしていただき、1 年目の 2 月と 2 年目の 2 月にこの省察をまとめた「新任教員教育推進費活用実践報告書」のご提出をお願いしています。なお、「新任教員教育推進費活用実践報告書」のご提出につきまして、1 月 20 日頃（予定）に事務局よりご案内を差し上げます。

特記事項

- ① 1 年目にティーチング・ポートフォリオもしくはコースポートフォリオをご提出される方は、ご面倒ですが、2 年目の 2 月に本文（のみ）を再度ご提出ください。その際、本文を更新していただけると幸いです。
- ② 2 年目にティーチング・ポートフォリオもしくはコースポートフォリオをご提出される方につきましては、ティーチング・ポートフォリオを「新任教員教育推進費活用実践報告書」の代替する報告書とさせていただきます。

資料 5

●●年度 新任教員教育推進費活用実践報告書

※ 今年度、授業を担当されていない先生におかれましては 2 ～ 5 のみご記入下さい。

提出日	●●年（ ）月（ ）日
氏名	教職員コード（ ）
所属学部・機関	
内線	（ ）－（ ）
1. ●●年度担当科目一覧	●●年度に担当したすべての授業の概要（授業に関連する個別相談を含む）
2. 教育の方法と教育の工夫	自分が実施した授業方法ならびに工夫した点など。（全ての授業について記述することはありません。自分の教育理念を最も実現しようとして実施したと考える方法や工夫について記述して下さい。）
3. 教育の効果	2.に対応する具体的な成果や改善点など。
4. 担当科目以外の教育活動	担当授業以外の、学生への支援、学外組織・機関への教育支援など。
5. FD 推進費の活用	FD 推進費の活用用途について

* 2 ～ 4 について、新任研修 FD プログラムで獲得した知識・技能がのどのように活用されたかについてもお書きください。

オンデマンド講義 講義概要一覧

※講師の所属は、いずれも撮影時点での所属です。

●必修	分 野：「高等教育論Ⅰ」 テーマ：「現代の高等教育」
講師	金子 元久（筑波大学）
到達目標	①日本及び世界の高等教育の状況を説明できる。（知識） ②自らの大学の置かれた立場と今後の対応を考えることができる。（知識）
概要	
Part 1	1. 焦点としての大学教育 ①大学への社会の目 ②社会経済の変化と大学教育 ③大学教育への負担構造のシフト ④主要な論点
Part 2	2. 大学教育の現状 ①現代の学生 ②大学教育との同調度 ③学生の学習時間 ④自律的学習時間の不足 ⑤日本型学習の特徴
Part 3	3. 改革への道 ①なぜ改革が必要か ②大学教育と職業 ③授業方法の改善 ④大学教育改革への課題 ⑤大学職員の役割

◎選択	分 野：「高等教育論Ⅱ」 テーマ：「高等教育研究史」
講師	有本 章（比治山大学）
到達目標	日本及び世界の高等教育研究の沿革を説明できる。（知識）
概要	
Part 1	高等教育研究の制度化 高等教育の研究が世界的に開始されたのは、800 年の長い大学史に照らすと立ち遅れ、欧米では 19 世紀後半から、日本では 20 世紀後半からであるとみなされる。知識社会化が進行する 21 世紀には、知識社会の拠点である大学の社会的重要性が高まることから、高等教育研究の比重は高まる。
Part 2	高等教育研究の方法論と研究事例 研究の方法には、哲学的、歴史学的、比較学的、社会学的などの方法が考えられるので、各方法の研究の視点、特徴、研究者などを検討する。主要には縦軸からと横軸からの高等教育研究へのアプローチがあることを理解し、それに基づいて、縦軸と横軸からの若干の研究事例を瞥見する。
Part 3	高等教育研究の成果と課題 社会学的アプローチを事例に、知識論をはじめ大学の社会的条件、社会的機能、社会的構造の側面から研究事例を検討する。知識論は、知識の発見・伝達・応用・統制などに注目して、学問の生産性、学問中心地の移動、高等教育システムの比較などを研究する。社会的条件は高等教育発展段階、高等教育政策、国際化・グローバル化など、社会的機能は、研究の研究、研究・教育・学習の連携など、社会的構造は、大学のシステム・組織・集団などに焦点を合わせて研究する。最後に、これら研究成果と課題を分析すると、歴史・構造モデルと知識モデルの照合などが必要。

◎選択	分野：「高等教育論Ⅲ」 テーマ：「大学改革とFD研究」
講師	江原 武一（立命館大学）
到達目標	現在世界同時進行の形で進められている大学改革の特徴や、日本の大学における教員研修（FD）の現状を幅広い観点から考えるための基本的な見方や用語を理解し、活用することができる。（知識）
概要	
Part 1	「社会変動と大学の変容」 1980年代後半以降、世界の各国は大規模な大学改革を急速に進めてきている。この世界同時進行の大学改革をうながす共通の主要な背景を、①社会のグローバル化（グローバリゼーション）と市場化の進展、②国民国家の政府のあり方にみられる「大きな政府」から「小さな政府」への転換の2つに集約して解説する。
Part 2	「大学改革の基本的方向」 大学は今後、自立的で健全な大学経営が重視される「大学経営」の時代に直面すると予想し、大学改革の基本的方向を、①大学経営の健全化、②増大する利害関係者のニーズへの対応、③多様化する大学の3つにまとめて整理する。
Part 3	「大学改革と教員研修（FD）の課題」 日本の大学制度の特徴を簡略にまとめたあと、進展する大学改革のなかで、FD、つまり教員研修はどのように位置づけられ、どのような問題や課題があるのかを明らかにし、今後の方向を探る。
参考文献	1. 江原武一『転換期日本の大学改革—アメリカとの比較』東信堂、2010年。 2. 江原武一・南部広孝編著『現代教育改革論—世界の動向と日本のゆくえ—』放送大学教育振興会、2011年。 3. 有本章編著『変貌する世界の大学教授職』玉川大学出版部、2011年。 4. 江原武一「大学と国家・市場」広田照幸他編『組織としての大学—役割や機能をどうみるか』（シリーズ 大学第6巻）岩波書店、2013年。

◎選択	分野：「高等教育論Ⅳ」 テーマ：「大学評価論」
講師	安岡 高志（立命館大学）
到達目標	①日本及び世界の大学評価の沿革と現状ならびに今後の方向性について説明できる(知識)
概要	
Part 1	世界の大学評価の歴史と現状 大学評価は何のために行われるのか。大学評価が導入された背景は何だろうか。国によって背景も目的も評価システムも異なる。主な国の特徴を紹介するとともに日本との差異について紹介する。
Part 2	大学基準協会の評価 大学基準協会は理念・目的から内部質保証に至るまで10項目について点検項目を設定している。この内、1. 理念目的、3. 教員・教員組織、4. 教育内容・方法・成果の項目を解説することにより、何が求められているかを解説する。
Part 3	自己点検・評価の在り方 認証評価を得るためにも、内部改善のためにも自己点検・評価は欠かすことのできないもので、その手法はPDCAサイクルである。自己点検・評価を実効あるものにするためには組織がPDCAサイクルを回さなければならないので、PDCAサイクルを機能させるための条件について紹介するとともに、今後自己点検・評価の在り方について言及する。
参考文献	1. 山野井敦徳・清水一彦編「大学評価の展開」、東信堂

○オプション	分 野：「高等教育論Ⅴ」 テーマ：「高等教育政策－戦後日本の大学政策（転換期の大学政策、海外との比較）」
講師	高野 和子（明治大学）
到達目標	① 戦後の日本における大学政策の展開と課題について理解する。（知識）
概要	
Part 1	戦後改革から高等教育計画の時代 第二次世界大戦後の新しい大学制度の発足から、1980 年代末までの時期における大学政策について、18 歳人口と進学率の推移、「高等教育」と「大学」の違いなどにふれつつ概説する。
Part 2	大学改革－競争原理の時代 1990 年代以降、急速かつ絶え間なく進んでいる大学改革は、伝統的な秩序の崩壊・破壊と再編（天野郁夫）をもたらしている。1991 年・大学審議会答申「大学教育の改善について」から今日に至る約 20 年間の大学政策を整理する。
Part 3	教育の国際化と日本の大学教育の課題 国際化のなかで進んでいる「国境を越えて提供される高等教育」の状況について解説するとともに、Part 2 でみた日本の大学改革について、海外からはどのような課題があると見られているのか、OECD(経済協力開発機構)が 2009 年 3 月に発表したレビュー報告書から紹介する。

◎選択	分 野：「高等教育論Ⅵ」 テーマ：「接続教育：初年次教育の取組」
講師	山田 礼子（同志社大学）
到達目標	①初年次教育の重要性、そのための取組の意義を理解できる。（知識）
概要	
Part 1	大学への進学率が 50%を超え、多様化する学生を多く迎える現在、初年次教育の内容や効果の検証についての課題は依然として残されているが、その拡がりや拡大時期の急速さから判断するかぎり、初年次教育は普遍化しているといっても過言ではない。初年次教育が、多くの大学で導入されるようになった背景には①学生の変容、②政策的側面の変化、すなわち大学をより教育を重視する場へと変革させるような政策の存在、③社会から求められる教育効果の提示といった内在的及び外在的な圧力があることは明白である。本講義では、初年次教育の重要性についてデータから分析しながら、取組の意義について理解することを目的とする。
Part 2	私学高等教育研究所の導入教育研究グループは 2001 年に導入教育に関する調査を全国の私立大学の全学部を対象に実施した。当時においては初年次教育の定義、概念はそれほど一般的に普及している状況ではなかったにもかかわらず、初年次教育を導入している比率は 80%を超えていた。調査の際には、日本における初年次教育を一般的に高校から大学への学習面、生活面を含めての円滑な移行を目指すための教育であると定義した。具体的には、（１）スタディ・スキル（一般的なレポート・論文の書き方や文献の探し方、コンピュータ・リテラシー）の教育、（２）スチューデント・スキル（大学生に求められる一般常識や態度）の教育、そして、（３）専門教育への橋渡しとなるような基礎的知識・技能の教育という 3 つの内容を包含する教育プログラムを初年次教育とみなし、さらに教育課程外での初年次生を支援するオリエンテーション・プログラムや課外活動支援プログラム、その他の初年次生を対象としたプログラムも含めて初年次教育プログラムとして位置づけた。調査結果として、このような内容を含む初年次教育プログラムが提供されていることが一般的であることが判明した。

Part 3	2007 年には国立教育政策研究所と私学高等教育研究所の導入教育研究グループとの共同により再調査を実施した。2001 年調査と 2007 年調査の結果を比較することにより、この間の初年次教育の拡がりや展開、そして展開の特徴については、以下のようになる。2001 年当時においては初年次教育の定義、概念はそれほど一般的に普及している状況ではなかったにもかかわらず、初年次教育を導入している比率は 80.9%に達していた。これが 2007 年になるとさらに増大し、95.6%にまで上昇している。2001 年は理系・社会系学部でやや多いという特徴がみられたが、2007 年には学部系統に関係なく、さらに拡大普遍化していることがこの間の差異である。 2001 年調査で明らかになった初年次教育の目的、内容、水準、教材等に対する教員間での合意形成の困難、科目間での指導方法のばらつきといった諸課題に対して、各大学で徐々に対応が図られてきていることが見て取れる。学びへの導入については学部主体でプログラムが提供されている一方で自校教育、キャリアデザインは学部以外の組織が提供されているという現実、あるいは 74.9%が学部以外の組織が提供するプログラムありと答えていることから、プログラムの整備、標準化がしだいに進むとともに、学部を超えて、初年次教育が広がっていることから初年次教育「第 2 ステージ」の幕開けと位置づけられる。
---------------	--

○おしり	分 野：「高等教育論Ⅶ」 テーマ：「大学の国際化」
講師	モンテ・カセム（立命館大学）
到達目標	①大学の国際化についての基本的知識の習得、理解を図る。 ②今後の国際化に向けた大学運営の在り方に示唆を与える。

○選択	分 野：「教授学習理論Ⅰ」 テーマ：「教授・学習の理論と教育実践(1)」
講師	久世 均（岐阜女子大学）
到達目標	①教授学習に関する基本的な理論を具体的に説明することができる。（知識） ②行動主義と認知主義の 2 つの学習論の区別を説明することができる。（知識）
概要	
Part 1	1. 教授・学習の理論の変遷 （1）行動主義的学習論 ①行動主義の考え方とオペラント条件づけの考え方を知る。 ②行動主義的学習論の代表として、スキナーのプログラム学習の 5 つの原理を取りあげる。 ③行動主義で学習を捉えることの利点と問題点を考える。 （2）認知主義的学習論 ①ピアジェの同化と調節の考え方を知る。 ②ピアジェの認知・発達論や応答する環境などの認知主義的学習論について考える。 ③行動主義と認知主義の 2 つの学習論を対比し、それぞれの特徴を確認する。 2. 構成主義的学習論や社会構成種的学習論
Part 2	3. これからの学習論について考える

○選択	分 野：「教授学習理論Ⅱ」 テーマ：「教授・学習の理論と教育実践(2)」
講師	久世 均（岐阜女子大学）
到達目標	①インストラクショナルデザインを基にして授業を組み立てることができる。（知識） ②これからの時代に求められる学力を説明できる。（知識）
概要	
Part 1	1. インストラクショナルデザイン ①ADDIE モデルについて知る。 ②キャロルの学校学習の時間モデルについて知る。 ③ブルームのタキソノミーについて知る。 ④ARCS モデルの4 要因について知る。 ⑤ガニエの9 教授事象について知る。
Part 2	2. これからの時代に求められる学力 ①学力の構造について知る。 ②キー・コンピテンシーと生きる力について知る。 ③21 世紀型スキルについて知る。 ④21 世紀型学力を育成する授業への変革について考える。

○オプション	分 野：「教授学習理論Ⅲ」 テーマ：「アクティブ・ラーニングの理論と実践における課題」
講師	三浦 真琴（関西大学）
到達目標	①アクティブ・ラーニングが脚光を浴びている背景について説明できる。（知識） ②アクティブ・ラーニングを実現するための方法について説明できる。（知識） ③アクティブ・ラーニングを目指す授業をデザインできる。（技能）
概要	
Part 1	①「アクティブ・ラーニング」に多様な定義が与えられている理由について説明する。その上でこの用語には厳格な定義はなじまないことを説明する。 ②PBL や IBL など、学生のアクティブ・ラーニングを実現するための方法が登場した背景について説明する。
Part 2	①アクティブ・ラーニングを実現するために提示された理論のうち、実践に資すると思われるものを紹介する。 ②PBL や IBL の基本的な考え方について説明する。
Part 3	①PBL 型授業を展開していく上で留意すべき点について説明する。 ②PBL 型授業を受講した（PBL 型学習を体験した）学生の成績評価について留意すべき点について説明する。

●必修	分 野：「教育方法論Ⅰ」 テーマ：「教育工学の観点から」
講師	林 徳治（立命館大学）
到達目標	①高等教育で用いられる教授方略と方術を説明できる。（知識） ②自らの授業の教授方略と方術を分析し説明できる。（技能）
概要	
Part 1	大学授業において、教員から学ぶ（行動主義）、自ら学ぶ（構成主義）の観点からみた2つの学び方の特徴について講義する。
Part 2	アクティブラーニングの定義や特徴、および自己の授業への活用について講義する。 コミュニケーション能力の3つの柱について講義する。
Part 3	大学での主体的な学生参画の授業づくり（強制連結法）について講義する。大学授業での論理的な思考能力（ロジックツリー）、表現伝達能力（マイクロプレゼンテーション）を育成する方法を講義し、実践事例について紹介する。
参考文献	1.林徳治他編著「教学改善のすすめ」、ぎょうせい、20016 年 2.沖裕貴、林徳治編著「相互理解を深めるコミュニケーション実践学」、ぎょうせい、2010 年

●必修	分 野：「教育方法論Ⅱ」 テーマ：「高等教育における授業技術」
講師	木野 茂（立命館大学）
到達目標	①大学授業のパラダイムシフトを説明できる。（知識） ②自らの授業における授業技術を省察できる。（態度）
概要	
Part 1	大学授業のパラダイムシフト 1970 年前後の大学の大学の大衆化により大学の授業は旧来の知識伝授型から学生の主体的な学びを促す授業への転換が求められるようになった。しかし日本ではこの大学授業のパラダイムシフトが遅れ、中教審答申に登場したのも 2008 年の FD 義務化以後である。パラダイムシフトとは何かを説明する。
Part 2	新しいパラダイムの授業—双方向型授業への誘い 新しいパラダイムの授業に必要なのは、学生の主体的・能動的な学びを引き出す双方向型授業で、アクティブ・ラーニングとも総称される授業法である。双方向型授業の基本と工夫を具体的な実例をあげて説明する。
Part 3	新しいパラダイムの授業の効果 新しいパラダイムの授業で何が変わるかを、実際にそういう授業を受けた学生のアンケートをもとに紹介する。授業コミュニケーションによる効果、学修時間への効果、新しいパラダイムの授業による学修効果、今後の大学授業のあり方などで、新しいパラダイムの授業で学生が変わることを示す。
参考文献	1.木野茂（2005）、『大学授業改善の手引き—双方向型授業への誘い』、ナカニシヤ出版 2.木野茂（2009）、「学生とともに作る授業—多人数双方向型授業への誘い」、『学生と変える大学教育—FD を楽しむという発想』（清水 亮・橋本 勝・松本美奈編）、136-151 頁、ナカニシヤ出版 3.木野茂（2010）、「学生とともに作る授業を求めて—ドキュメンタリー・環境と生命」、『学生主体型授業の冒険』（小田・杉原編）、ナカニシヤ出版 4.木野茂（2013）、「双方向型授業への誘い—大学授業のパラダイム転換を求めて—」、『しぜん』、東京教学社

◎選択	分 野：「教育方法論Ⅳ」 テーマ：「学習教材作成における著作権等の理解」
講師	坂井 知志（常磐大学）
到達目標	①学習教材として写真や映像、文献資料などを用いる際に留意すべき著作権等の法律について理解する。（知識） ②著作権や個人情報保護法などに留意して、文献や各種資料を活用する。（態度）
概要	
Part 1	教育と著作権 今までの教育は、教室という限られた空間と特定の学生に対して行っていた。しかし、デジタル技術やネットワークが整備されたことにより新たな可能性と問題点を生み出している。著作権などの制度を理解したうえで適切に技術を選択する必要性について整理する。
Part 2	学習教材作成上必要な知識 著作権法の原則を知識として学ぶとともに、著作権法を遵守しながら学習教材をどのように作成することが望ましいのかについての方法論も学ぶ。また、デジタル・アーカイブなどの情報源を教員相互に構築することの必要性についても整理する。
Part 3	著作権等のガイドラインと情報源 著作権法に関する二つのガイドライン（権利団体と文部科学省作成）と個人情報に関する私立大学情報教育協会（私情協）の「教員のための個人情報活用ガイドライン」についての概略を解説するとともに学習教材を作成するための情報源について説明する。

●必修	分 野：「教育方法論Ⅴ」 テーマ：「学生授業評価の読み方と授業への活用」
講師	安岡 高志（立命館大学）
到達目標	①課題をもって授業に臨む態度が身に付く。（態度）
概要	
Part 1	先進国（米国）から学ぶ 授業評価の結果を正しく読むためには基本的な授業評価の性質を知っておく必要がある。授業評価に関しては先進国である米国の例を題材に、どのような因子がどのように影響するかを紹介する。
Part 2	日本の学生の意見を聞く 日本の学生が示すデータと米国の学生が示すデータの比較を行うとともに、授業改善に対する学生の意見を紹介する。
Part 3	Teaching Award 受賞者に聞く Teaching Award 受賞者に授業を行うに当たって心がけていることや、良い授業を行うための工夫を紹介する。学生の意見や Teaching Award 受賞者の意見を参考に授業改善に興味を持って取り組む姿勢が身に付くことを期待する。

◎選択	分野：「教育方法論Ⅵ」 テーマ：「情報活用基礎 - ICT を活用した学習コミュニティづくり -」
講師	中島 英博（名城大学）
到達目標	①大学における ICT を活用した学習コミュニティづくりの意義について知る。（知識）
概要	
Part 1	学生がコミュニティの中で学習することの意味について考えます。学生が卒業後に活躍する社会では、より国際化する環境の中で、知識が急速に変化・発展すると考えられます。そこでは、他者と協力して新しい知を創造し、構築しながら、仕事を進められる人材が求められるでしょう。学生が大学在学中にコミュニティで学ぶ経験を持つことは、今後より重要になると考えられ、コミュニティで学ぶ機会を積極的に設けることが、教員および大学全体にとっての責務と言えるでしょう。
Part 2	コミュニティで学ぶ機会を設ける方法の 1 つとして、協同学習を取り上げます。協同学習を設計する上での原則を確認するとともに、具体的な事例を紹介します。協同学習を取り入れる際には、ICT を活用することで、より実践が進めやすくなります。
Part 3	コミュニティで学ぶ経験を得るうえで、協同学習という方法は、有効な方法の 1 つですが、教員が直面する授業環境によっては、こうした方法の採用が困難な場合も多くあります。その場合でもできる限り、授業への帰属意識を高め、授業への参加を促すことは、学生の学習成果を高めることに貢献します。ここでは、ICT を活用することで、学生の授業への参加意識を高め、日常の教室をコミュニティへ近づけるための方法を考えてみましょう。

◎選択	分野：「授業設計論Ⅰ」 テーマ：「大学の授業の設計」
講師	沖 裕貴（立命館大学）
到達目標	①カリキュラムや授業の設計において、学習成果を明確にし、適切に到達目標（行動目標）を設定することができる。（知識、技能） ②カリキュラムや授業の設計において、適切な評価の観点と方法を選ぶことができる。（知識、技能）
概要	
Part 1	「各学部・学科での観点別人材養成像（DP）の策定と公開」（スライド 1～17） ① 本講義の到達目標 ② 「待ったなし」の日本の大学の状況 ③ 大学評価に関連する法令 ④ 内部質保証システムの構築 ⑤ 高等教育の質保証の観点 ⑥ DP、CP、AP とは ⑦ DP と CP の明確化の方策 ⑧ 観点別教育目標の理論 ⑨ 観点別人材用製造（DP）の例 －立命館大学文学部、JABEE、ハーバード大学コアカリキュラム、滋賀県立大学工学部電子システム工学科 ⑩ DP 策定の留意点
Part 2	「1. 観点別の到達目標を備えたシラバスの策定と公開」「2. カリキュラム・マップ、カリキュラム・ツリーの策定と公開」（スライド 18～38） ① 科目の観点別到達目標の例 山口大学「芸術論特殊講義」 ② 到達目標の思い違いとあるべき姿 ③ 科目の観点別到達目標の例 「線形代数」、「外国語教育科目」 ④ 観点別到達目標作成の留意点 ⑤ 観点別の到達目標の練習問題 1、2

	⑥ カリキュラム・マップ、ツリーとは ⑦ カリキュラム・マップ例、カリキュラム・ツリー例 滋賀県立大学工学部（マップ、ツリー）、山口大学教育学部（マップ）、立命館大学文学部（マップ）、中部大学人文学部（ツリー）、愛媛大学理学部（ツリー）、愛媛大学教育学部（ツリー）、宇都宮大学工学部（ツリー）
Part 3	「観点別到達目標ごとの成績評価基準の策定と公開」（スライド 39～61） ① 大学における成績評価に関する法令 ② ルーブリックとは ③ Rubric Template (Huba & Freed, 2000) ④ ルーブリック評価とは ⑤ Rubric Template (Japan) ⑥ 「現代の教育」レポート試験ルーブリック（沖） ⑦ 学会論文の査読もルーブリック ⑧ イギリスの大学の成績評価 ⑨ VALUE Rubrics (AAC&U) ⑩ ルーブリックの効果（教員・学生・カリキュラム） ⑪ ルーブリック活用例 ⑫ ルーブリック評価の実際の手順と事例（手順 1 と手順 3）

○お°ショ	分野：「授業設計論Ⅱ」 テーマ：「授業設計と授業方法・技術・評価」
講師	横田 学（京都市立芸術大学）
到達目標	①授業設計に沿った効果的な授業方法・技術について説明できる。（知識） ②授業を適切な観点から評価することができる。（知識、技能、態度）
概要	
Part 1	基本的な授業設計の考え方 ①教育を支える「教授学習論」「教育方法論」「教育評価論」などと具体的な授業設計の関係について確認する。 ②ディプロマ・ポリシー、カリキュラムポリシー、アドミッション・ポリシーと個々の授業の授業設計について考える。
Part 2	具体的な授業設計と効果的な授業方法・技術 ①実際に授業設計を行う時の視点として、授業設計の 5W1H を考える。 ②授業設計を行うにあたって必要な授業分析を行い、効果的な授業方法について考える。 ③授業設計を形にする方法としての指導案の作成について知る。
Part 3	授業の評価と授業改善 ①PDCA に基づく授業改善の必要性について考える。 ②授業の評価方法としての模擬授業や授業研究について知る。 ③授業評価を授業改善に生かす方法について考える。

◎選択	分野：「教育評価論Ⅰ」 テーマ：「成績評価の意味と方法」
講師	鳥居 朋子（立命館大学）
到達目標	①授業の到達目標（行動目標）に沿って適切な評価方法と評価基準を設定できる。（技能） ②教授方略、教授方術に沿って適切な学習成果の評価方法を検討し、開発（例：ルーブリック評価等）できる。（知識、技能） ③自らの授業に関して客観的かつ厳格な成績評価と学習者への適切なフィードバックを心がける。（態度）

概要	
Part 1	成績評価の方法と基準に関する導入 大学の授業における成績評価の現状と問題点、「厳格な成績評価」の意味、成績評価の目的、成績評価の意義（教育的機能）、評価の対象（到達目標との整合性）、成績評価に求められる条件（妥当性、信頼性、客観性、効率性等）、成績評価の流れ、成績評価のタイミング（診断的評価、形成的評価、総括的評価）等について、いくつかの事例を示しながら解説する。
Part 2	成績評価の方法と基準の設定をめぐる具体的な手法 成績評価の方法（論述試験、口頭試験、客観試験、シミュレーション、実地試験、観察・記録法、論文・レポート）、成績評価の方法と評価可能な目標との関係（知識、理解、技能、態度等）、学習のプロセスや質を重視した評価方法（チェックリスト、ルーブリック）、絶対評価と相対評価、GPA（意義、算定方法、活用例）等について、いくつかの事例を示しながら解説する。
Part 3	成績評価のフィードバックの方法及びまとめ 成績評価の学生へのフィードバックの方法（授業のプロセス、授業終了後）、成績点の開示、学生からの成績申し立てへの対応等について解説し、最後に成績評価の基準と方法の設定に関するセルフチェックポイントを提示することによって講義のまとめを行う。
参考文献	1.池田輝政他『成長するティップス先生』玉川大学出版部、2001 年 2.愛媛大学教育・学生支援機構教育企画室編集『愛媛大学 FD ハンドブック Vol.1 もっと!! 授業良くするために－シラバス作成から成績評価まで－第二版』愛媛大学、2007 年 3.名古屋大学高等教育研究センター編『プロフェッショナルスクールのための授業設計ハンドブック』名古屋大学高等教育研究センター、2004 年 4.北海道医療大学 FD 委員会編『北海道医療大学 FD ハンドブック 大学教育の設計』北海道医療大学、2003 年

◎選択	分野：「教育評価論Ⅱ」 テーマ：「目的準拠測定に基づく評価」
講師	野嶋 栄一郎（早稲田大学）
到達目標	①授業の目的にあった試験、課題等のあり方について理解する。（知識）
概要	
Part 1	目標準拠測定と集団準拠測定 ①テスト得点の解釈における二つの立場 ②二つの測定の特徴
Part 2	教育目標 ①ブルームによる教育目標の分類学 ②認知的領域のタキソノミー ③情意的領域のタキソノミー ④教育目標の妥当性と明確性 ⑤教育目標の記述
Part 3	目標準拠テストの設計 ①テスト領域を定める ②学習内容の分析 ③教授目標の記述 ④コースアウトラインの作成 ⑤目標明細表の作成 ⑥達成基準の設定 ⑦テスト項目の記述

◎選択	分 野：「教育評価論Ⅲ」 テーマ：「ティーチング・ポートフォリオとは」
講師	栗田佳代子（大学評価・学位授与機構）
到達目標	①ティーチング・ポートフォリオ作成の意義を理解する。（知識） ②ティーチング・ポートフォリオの作成方法を説明できる。（知識）
概要	
Part 1	ティーチング・ポートフォリオ作成の意義と目的 ティーチング・ポートフォリオの歴史を振り返り、その作成意義を教員（個人）と組織の両面から考えます。また、作成目的についてさまざまな視点から述べます。
Part 2	ティーチング・ポートフォリオの特徴と構造 「自己省察」「エビデンスによる裏づけ」「柔軟性」「厳選された情報の集積」の観点からティーチング・ポートフォリオの特徴について考えます。また、その構造について具体的に述べます。
Part 3	●ティーチング・ポートフォリオの作成と更新 実際にティーチング・ポートフォリオを作成するにあたっての留意点や用いる手法について、実践例をもとに紹介します。

●必修	分 野：「心理学Ⅰ」 テーマ：「青年期の心理」
講師	白井 利明（大阪教育大学）
到達目標	①発達心理学の一領域である青年心理学の基礎的事項を説明できる。（知識） ②青年期における心の葛藤、発達課題を説明できる。（知識） ③指導する学生に対して、青年期の心理を理解した上で対応することを心がける。（態度）
概要	
Part 1	青年期の概要を説明する。 ①青年期はいつからいつまでか。 ②青年期の発達課題とは何か。
Part 2	青年期の葛藤の理解の仕方を説明する。 ①青年期の発達の意義 ②青年期の歴史的意義
Part 3	青年期の教育について発達の視点から考える。 ①青年期発達の視点を入れることの大切さ ②大学教育への示唆
参考文献	1. 白井利明（著）「社会への出かたー就職、自立、自分さがしー」、新日本出版社、2014 年、ISBN：9784406058438 2. 白井利明ら（編）「よくわかる青年心理学 第二版」、有斐閣、2015 年、ISBN：9784623072491 3. J. コールマンら（著）「青年期の本質」、ミネルヴァ書房、2003 年 ISBN：9784623038848

◎選択	分 野：「心理学Ⅱ」 テーマ：「発達の原理と各段階の特性」
講師	西垣 順子（大阪市立大学）
到達目標	①発達と成長の原理を説明できる（知識） ②青年期という発達段階の特性を、児童期や乳幼児期との対比で説明できる（知識） ③学生（特に新入生）が遭遇しやすい困難について説明でき、自らの教育活動の中で参照できる（知識、技能、態度）

概要	
Part 1	「そもそも発達とは何か」という問題について考えます。発達と成長はどう違うのか、発達と教育の関係はどのようなものか、発達という視点を持つことで大学や社会がどのように異なって見えるようになるのかといった問題を取り上げます。また、通常の場合に 20 歳前後に生じる発達の質的転換についても説明します。多少なりとも抽象的な話になりますが、お付き合いください。
Part 2	青年期または学校から社会への移行の時期における発達変化の特徴として、学業に関わる認識のあり方の変化と自己理解のあり方の変化について説明します。
Part 3	前半では大学生が遭遇しやすい困難として、初年次段階での困難とその背景について説明します。後半では、Active Learning 型の授業に苦手意識を持ちやすい可能性のある学生として発達障害について取り上げます。
参考文献	中村隆一 2013 「発達の旅—人生最初の 10 年」 クリエイツかもがわ 西垣順子 2016 「青年教育としての大学を拓くために—発達心理学の観点から」 大学評価学会（編）『グローバル人材育成と発達保障の相克—大学は青年とどう向き合うのか—（仮）』晃洋書房 西垣順子 2016 「発達を識っていくということ—発達教育の今日的意義」人間発達研究所（編）『発達研究の創出』群青社 窪内節子・設楽友崇・高橋寛子・田中 健夫 2015 『学生相談から切り拓く大学教育実践：学生の主体性を育む』学苑社

◎選択	分 野：「心理学Ⅲ」 テーマ：「臨床心理学の基礎と応用」
講師	徳田 完二（立命館大学）
到達目標	①臨床心理学的な学生理解と対応の基本を理解し、説明できる（知識、技能） ②大学生の悩みの特徴と回復の基本を理解し、説明できる（知識、技能） ③発達障害（LD,アスペルガー障害等）の学生の特徴を知り、適切に対応する態度をもつ（態度）
概要	
Part 1	欠席の多い学生を例として、臨床心理学的観点からは学生をどのように理解すればよいのかについて解説し、心理的問題を抱えた学生に対してどのように対応すればよいのかについて述べる。
Part 2	大学生という発達段階における悩みの特徴を、入学期、中間期、卒業期という段階ごとに解説する。また、心理的不調から回復する過程、およびそれに関わる教員の役割について述べる。
Part 3	アスペルガー障害を含む自閉性障害、注意欠陥多動性障害、学習障害という、主な発達障害の特徴について述べ、アスペルガー障害の学生の特徴をふまえた対応の仕方について解説する。

●必修	分 野：「心理学Ⅳ」 テーマ：「発達障害のある学生の学び－アスペルガー症候群を中心に－」
講師	荒木 穂積（立命館大学）
到達目標	①発達障害（アスペルガー症候群）の歴史と現状について知る。（知識・理解） ②発達障害のある人（アスペルガー症候群のある人）へのライフサイクルから見た特徴とその生きづらさについて知る。（知識・理解） ③発達障害のある学生（アスペルガー症候群のある学生）への学びの支援について関心をもつ。（意欲・態度）

概要	
Part 1	発達障害の一つであるアスペルガー症候群の歴史と現状について知る。アスペルガー症候群は知的障害をともなわず、大学で支援が必要な発達障害の一つである。アスペルガー症候群の歴史、診断基準、出現率、特別支援教育およびアスペルガー症候群のある人のおかれている現状についての知識と理解を深める。
Part 2	アスペルガー症候群のある人のライフサイクルについて知る。アスペルガー症候群のある人の幼児期、学童期、思春期、青年期以降の時期における行動の特徴および生きづらさなどの諸問題について知識と理解を深める。また、その特徴である自閉症スペクトラムの「3 つ組みの障害」および発達支援についてアスペルガー症候群のある人の場合について具体的に知る。
Part 3	アスペルガー症候群のある学生への学びの支援について、大学での場合を中心に具体例を述べ、関心を高める。特に、青年期における「障害」の自己認識、障害表明と自己権利擁護、代理者（代弁者）の役割、大学における学びの支援等について具体的に述べる。また、障害学生支援委員会（仮称）の役割および合理的配慮の必要性について述べ関心を高める。

◎選択	分 野：「研究者倫理Ⅰ」 テーマ：「教員と学生の教育・研究を促進するツールとしての研究倫理」
講師	望月 昭（立命館大学）
到達目標	①研究者に求められる基本的な研究者倫理について理解する。（知識） ②研究者に求められる基本的な研究者倫理を守ろうとする。（態度）
概要	
Part 1	研究「者」倫理と研究倫理 昨今、研究費不正使用、ハラスメント、データのねつ造といった、研究に関わる様々な事件が問題になっている。しかし、これらの問題を一括して「研究者個人」の非倫理的行動とし、これを「意識」やルールによって抑制しようとしても限界があることは行動科学的観点からも明らかである。 そこで、コンプライアンスと倫理とは異なる問題であること、研究対象となる個人やグループと研究者との対立関係をする前提とするような「研究『者』の倫理」ではなく、研究行為が、対象となる個人やグループを含めて社会的に妥当性を持ち、広義に「利益」をもたらすものであるかを、常に再帰的に考え続けることを「研究倫理」と捉え、そのための具体的な環境設定の実現が大切であることを示す。
Part 2	人を対象とした研究の倫理 人文社会系の「人を対象とした研究」においては、基本的に研究対象者に対する侵襲性を最小にすることが求められる。研究者は置かれた様々な社会的制約や誘惑から自らを統制するために、いくつかの原則についてそれを履行できるような設定を設ける必要がある。すなわち、1）インフォームト・コンセント、2）プライバシーの保護、3）研究のフィードバックを含めた結果の社会公開である。さらに、4）先行研究の引用、5）データ収集、分析、表現の公正性（integrity）も挙げられる。これらの要件は、中長期的な研究行為の継続維持のためにも必要なものであり、これは学会発表・論文発表のみならず、学部の授業における学生の発表などにも適用すべき要件である。
Part 3	立命館大学における「人を対象とした研究倫理審査委員会」の運営 2009 年の秋から開始された IRB（Institutional Review Board）としての「立命館大学人を対象とした研究倫理審査委員会」の構造と運営について実践的に紹介する。その特徴は、学部学生も研究者として認め単独でも審査申請を行える点、禁止条項の羅列ではなく、学生も含めた研究者の研究行為の維持のために、リスクマネジメントに関して具体的に現存の制度を確認し必要な措置を推奨する点などが挙げられる。また、大学の研究に対する方針や姿勢を社会に向けて公開できること、研究の意味について学部・キャンパスを超えた議論ができるといった意義も示すことができる。

○ワークショップ	分野：「研究のアウトリーチ活動Ⅰ」 テーマ：「研究者にできる多様なアウトリーチ活動の紹介」
講師	半田 利弘（東京大学）
到達目標	① 研究者によるアウトリーチの様々な形態をその特徴と共に認識し、自己の目的にあった活動を実行する際の要点を把握する。（知識）
概要	
Part 1	研究者がアウトリーチ活動を行う目的はさまざまであり、アウトリーチの形態も多様である。それぞれの形態の長所・短所を理解し、自分の目的を意識することで、アウトリーチ活動を効果的に実行する方法について考える。
Part 2	アウトリーチのさまざまな形態として、従来から知られているものとは多少異なった特徴を持つ実践例をいくつか具体的に挙げ、その特徴を紹介する。
Part 3	伝えたい内容をどのように表現し、どのように演出して提示するかもアウトリーチでは重要である。研究者が留意すべき表現上・演出上の注意点を挙げ、アウトリーチを効果的に実行できるようになるヒントをどのようにして見つけるかを紹介する。

●必修	分野：「立命館学Ⅰ」 テーマ：「学習者が中心となる教育をすすめるために - 立命館大学での教育 -」
講師	中村 正（立命館大学）
到達目標	①立命館大学の学生の特徴、学生文化を理解する。（知識） ②立命館大学の教学の特徴を説明できる。（知識） ③立命館大学の大学文化や理念・目的、学風、教育研究支援体制等を理解する。（知識）
概要	
Part 1	立命館の歴史と精神 ・立命館学園の成り立ちや建学の精神、教学理念について ・立命館学園が育成する学生像について ・立命館大学や立命館アジア太平洋大学、附属校について
Part 2	立命館の教学 ・高等教育を取り巻く情勢と政策について ・立命館大学における教学の考え方とその内容について ・学生の変化と新たな教学展開
Part 3	教育の課題とFDについて ・FD（ファカルティ・ディベロップメント）とは ・各種調査から見る本学の学生実態について ・立命館大学への社会的評価とは ・教職協働とサポート体制について

○ワークショップ	分野：「立命館学Ⅱ」、「立命館学Ⅲ」、「立命館学Ⅳ」
講師	坂本 和一（立命館大学）
到達目標	立命館学Ⅱ：立命館学園通史－1900年～2008年－
	立命館学Ⅲ：1980、90年代の『学園創造』 －とくに、BKC開設・理工学部拡充移転、BKC新展開を中心に－
	立命館学Ⅳ：立命館アジア太平洋大学（APU）はいかにして創られたか。

◎選択	分野：「大学管理運営Ⅰ」 テーマ：「大学教職員のための大学管理運営基礎」
講師	肥塚 浩（立命館大学）
到達目標	①大学の組織的特徴を理解する。（知識） ②大学管理運営において教職員が果たすべき役割を理解する。（態度）
概要	
Part 1	知識社会における大学の役割を確認する。次に、私立大学は学校法人が設置するものであり、学校法人が設置する私立大学を含む学校は学校教育法に規定されたものであることから、私立大学は私立学校法と学校教育法の趣旨をよく踏まえて運営されるべきことを理解する。そして、こうした私立大学は自主性とともに、公共性が高いことが特徴であることから、その経営は非営利となることを理解する。さらに、非営利組織経営を考える視点として、使命、顧客、価値、成果、計画があり、これらから大学の組織的特徴を考える。
Part 2	大学の管理運営をガバナンスの視点から、その経営責任と合意形成メカニズムについて理解する。その際、トップダウンとボトムアップのバランスはいかにあるべきかに留意する。また、大学や小中高等の学校と法人の関係、すなわち教学と経営の関係（バランス）や、教員と職員との協力関係としての教職協働などについて考える。その上で、国立大学法人と私立大学法人の基本的に仕組みについて理解する。
Part 3	大学の使命と教職員の役割を考える際に、大学のミッションから教職員個人のレベルまで連動していることを理解する。次に、非営利組織である大学での教育研究における価値創造のために、戦略マップという枠組みで説明されるミッション、受託者や顧客、内部プロセス、学習と成長の各視点から考える。そして、教職員がキャリア開発を行ないながら働くことが、学生のキャリア支援にもつながることの指摘を行ない、最後に大学の管理運営上の課題を整理する。
参考文献	1. P・F・ドラッカー・上田惇生・田代正美訳『非営利組織の経営』ダイヤモンド社、1991年 2. 江原武一・杉本均編『大学の管理運営改革』東信堂、2005年 3. 龍慶昭・佐々木亮『大学の戦略的マネジメント』多賀出版、2005年

○オプション	分野：「大学管理運営Ⅱ」 テーマ：「近年の大学改革の進展を踏まえた大学管理運営の新たな発想」
講師	山本 眞一（桜美林大学）
到達目標	①大学改革を必要とする背景とそれに応じた大学の管理運営の基本について説明できる。（知識） ②大学教職員として、新たな状況に応じ管理運営上の適切な判断ができる能力を養う。（能力） ③併せて大学に求められるコンプライアンスとアカウンタビリティ醸成の基本的態度を学ぶ。（態度）
概要	
Part 1	近年の大学改革の進展は著しい。大学教育は急速な拡大と大衆化を経験し、また同時に18歳人口の減少による学生確保問題も深刻である。このような中、大学は入試による学生の潜在能力の選抜の場ではなく、入学した学生に知識や技術を身につけさせる教育の場であることを再認識しなければならない。大学の管理運営においても、制度に則ってしっかりと教育（コンプライアンス的発想）をし、かつ社会に対して有為な人材を輩出（アカウンタビリティ的発想）しなければならない、ということを念頭におく必要がある。
Part 2	大学は、教育・研究・社会貢献を通じて、社会とつながる公益的機関である。その大学の特色を生かすことは、コンプライアンスやアカウンタビリティの向上に寄与するものでもある。大学の管理運営の原則は、①設置者管理・負担、②学長・学部長のリーダーシップ、③教育研究上の重要事項を審議し、学長に意見を述べる機能をもつ教授会であるが、2014年の法律改正も踏まえつつ、このことの持つ意味を十分に理解することが必要である。また、これからの管理運営においては、教職協働の原則の下、教員だけではなく職員の能力・役割を高めることも必要である。

Part 3	大学は知識基盤社会において重要な役割が期待されており、その期待に沿うような大学づくりのために管理運営を行わなければならない。とくに今後若者のための教育機関としてだけではなく、生涯学習機関としての役割をも果たすには、大学における教育の有益性や質の向上に努めなければならない、これは管理運営上の問題としても重要である。
参考文献	1. 大崎 仁「大学改革 1945～1999」有斐閣 2. 山本眞一「大学事務職員のための高等教育システム論（改訂版）」東信堂 3. 山本眞一・田中義郎「大学マネジメント論」放送大学教育振興会 4. 山本眞一「質保証時代の高等教育（上・下）」ジアース教育新社 大学改革については文科省 HP http://www.mext.go.jp/

○初°シヨ	分 野：「大学管理運営Ⅲ」 テーマ：「リスクマネジメント：大学教員のためのキャンパスハラスメント」
講師	井口 博（東京ゆまにて法律事務所）
到達目標	①セクシャルハラスメント、アカデミック・ハラスメント、パワー・ハラスメントの概要について理解する。（知識） ②キャンパス・ハラスメントを起こさないように、自己の言動に気を配るようになる。（態度）
概要	
Part 1	キャンパス・ハラスメントには、セクシュアル・ハラスメント、アカデミック・ハラスメント、パワー・ハラスメントがあるが、それぞれの定義をまとめる。キャンパス・ハラスメントは、被害者が声を出せないことなどの特質がある。またキャンパス・ハラスメントに対しては、人権侵害であること、差別意識から生じること、暴力であること、教育権などの侵害であることなどの認識が必要である。 セクシュアル・ハラスメントについては、これまでの「対価型」「環境型」という分類よりも、「単発型」「継続型」という分類が有益である。判断基準としては相手にとって意に反する不快な言動であれば成立する。セクシュアル・ハラスメントでは「同意」の存在が問題になることが多いが、その同意は自由意思による真の同意でなければならない。「表見的同意」は同意とはいえない。 セクシュアル・ハラスメントの現状として、大学での調査や裁判の傾向についてまとめる。
Part 2	アカデミック・ハラスメントの現状としては、相談事例、事実調査事例とも増加している。その背景には教員の指導方法と学生の受け止め方にギャップがあることなどがある。 アカデミック・ハラスメントの事例としては、研究活動の妨害などさまざまなケースがある。具体例としては院生の例や懲戒処分例を紹介する。 パワー・ハラスメントの現状としては、相談例が少ないこと、雇用関係で主張されることが多くなっている傾向がある。パワー・ハラスメントの事例としては、暴力や不当な業務の強制や不当な評価などがある。
Part 3	ハラスメントの法律問題として、被害者が加害者とされる者に対して損害賠償を請求するほか、刑事責任を追及することもできる。また被害者は大学に対して、使用者責任だけでなく、修学・職場環境配慮義務違反を主張することもできる。加害者とされた者からは、被害申立者に対する名誉棄損などがある。 ハラスメントにはグレーゾーンがある。特にアカデミック・ハラスメントは、認定が困難な事例が多いと思われる。ハラスメントの認識については、鈍いがゆえに得をするということはない。認識をすべきであったにもそれを怠ったということになり、責任を問われる。最後にハラスメントの加害者にならないために5つの心得をまとめる。

◎選択	分 野：「大学管理運営Ⅳ」 テーマ：「IR 入門」
講師	鳥居 朋子（立命館大学）
到達目標	① IR（Institutional Research）の定義や歴史的展開を説明できる。（知識、技能） ② IR を担う専門組織である IR 室の基本的なサービスを説明できる。（知識、技能） ③ 教学領域の IR の事例をふまえ、自分の所属する組織でデータに基づく教育改善を実行する上で解決すべき課題を指摘できる。（思考、判断）
概要	
Part 1	IR に関するイントロダクション：IR の定義、大学で組織的に開発されてきた歴史的経緯、専門学会（Association for Institutional Research: AIR）の設立と IR の専門家集団の形成、諸外国への広がり等について、主にアメリカの事例を手がかりに解説する。さらに、近年、日本の大学で IR が注目されてきた背景（大学の外部環境の変化、質保証等）について説明する。
Part 2	IR 室の特質と基本サービス：Volkwein のモデル（「Craft structure（技術者組織型）」、「Adhocracy（委員会組織型）」、「Professional bureaucracy（専門的官僚機構型）」、「Elaborate profusion（分散型）」）による IR 室の組織的特徴、組織の位置付け、スタッフ体制、基本的なサービス、近年注目されつつある学習成果測定への貢献、IR における Research Question 等について、アメリカの事例に基づきながら、今日的課題である高等教育の質保証の文脈に照らし解説する。
Part 3	教学領域における IR の国内事例とまとめ：アメリカの事例に基づく日本への示唆をふまえ、教学領域の IR の実践事例として、立命館大学等の取り組み等を解説する。とくに、IR と FD のリンケージを目指した学習成果測定の取り組みと、結果の活用について紹介する。さらに、日本の大学で IR が機能するための ICT や組織体制に関するいくつかの課題を提示し、今後の展望に触れる。最後に、課題レポートの説明と主要参考文献を紹介する。
参考文献	・ Saupe, Joe L. (1990). The Functions of Institutional Research, 2nd edition. Tallahassee, FL: Association for Institutional Research. ・ 鳥居朋子（2010）「どうつくる？ 大学教育の質保証を支えるしくみ－教学領域の IR コトハジメ－」『ITL News』No.16 冬号、1－3 頁。

○オプション	分 野：大学管理運営Ⅴ テーマ：「業務改善のための IR」
講師	池田 輝政（名城大学）
到達目標	①業務の成果に係わる進捗指標がなぜ必要かを説明できる。 ②業務の成果に係わる進捗指標をなぜ分析する必要があるかを説明できる。 ③分析結果を誰にどのように報告するかを説明できる。
概要	
Part 1	到達目標①「業務の成果に係わる進捗指標がなぜ必要かを説明できる」に近づくには、『Data Stewardship』（データ・スチュワードシップ）というキーワードからアプローチする。データ・スチュワードシップの理解を促進するために、米国で活躍している日本人のデータ・アナリストの意見を紹介する。
Part 2	到達目標②「業務の成果に係わる進捗指標をなぜ分析する必要があるかを説明できる」に対しては、『Core Competence』（コア・コンピタンス）のキーワードに着目する。コア・コンピタンスの理解を深めるために、M大学の事例を紹介する。
Part 3	到達目標③「分析結果を誰にどのように報告するかを説明できる」を目指すためには、キーワード『Institutional Research Management』（IR 業務）の全体を概観する必要がある。このためには、米国の先端事例の一つとして評価されているノースウェスタン大学の IR 業務を事例として紹介する。

○ワークショップ	分野：大学管理運営Ⅵ / University Administration Ⅵ テーマ：大学管理職の職能開発 / Administrative Staff Development
講師	ブルース・ストロナク(テンブル大学ジャパン)/Bruce Stronach(Temple University, Japan)
到達目標	1. To understand the importance of maintaining a university-wide perspective and consciousness in developing and implementing policies and procedures. 2. To understand the importance of developing openness and lateral communication in administration. 3. To understand the need for a rigorous system of internal academic program review.
概要	
Part 1	The most important problem to tackle in Japanese universities is the need for horizontal communications that cut across all the various divisions that exist within universities. However, it is necessary to balance consciousness of the individual department and the group ethos of those who work in it and the university as whole. This pertains to all facets of administration but has special relevance to personnel development, decision-making, and institutional assessment. One key to finding and maintaining balance between the needs of the institution as a whole and the identity of individual units is a modified form of top-down decision-making. Top-down decision-making does not simply mean authoritarian rule by the top leadership. It depends on good vertical communication that informs and guides leadership while insuring middle and lower administrative levels are invested in decisions made at the top.
Part 2	Good communications is the key to good administration, and especially to the transfer of innovation and the creation of invention. Good communication is founded on empathy, openness and an appropriate movement of personnel. Communication depends on empathy and therefore it is essential that administrative staff members have an understanding of the needs of their “clients”, i.e., the constituents that they serve, as well as the needs of other divisions within the institution so that they can better understand their problems.
Part 3	The open flows of ideas are essential to open communication and one fundamental means of insuring that new ideas flow in to the administrative workplace is to maintain balance between maintaining a stable core of employees and allowing the in-flow and out-flow of employees in order to encourage the circulation of new ideas. Benchmarking is usually thought of as one element of institutional assessment but it is also an important part of maintaining open communication and the flow of new and innovative ideas. Benchmarking should also include the exchange of staff, as well as information, with benchmark institutions. This not only encourages the sharing of information and mutual learning of best practices, it also creates personal inter-relationships among staff of various institutions that will serve as a support for future collaboration. Maintaining a university-wide perspective and maintaining openness, innovation and movement depend upon, and result from, periodic internal reviews of academic programs based on outcomes assessment. In addition, any university's operations depend upon developing reliable data and using it as the basic source for future strategic and policy decisions. While it is assumed that all institutions have some form of internal review procedures and have a mechanism for self-studies in preparation for external assessment and review by accrediting agencies, four fundamental questions are: (1) How well is academic quality assessed internally? Academic quality is much less quantifiable than research output or operation outcomes but there is an equal need to have reliable and valid assessment of academic programs.

	(2) How well are internal and external assessments coordinated? (3) The answer to the above in part reflects how well the assessments have university-wide coordination. (4) How are the quality assessments instruments themselves evaluated and changed in order to insure that they are measuring the outcomes most important to the institution? More simply put, the university much ask each individual program (1) what do you do, (2) how do you do it, (3) why do you do it and (4) how do you plan to revise and improve what you do?
--	---

◎選択	分 野：「大学管理運営Ⅶ」 テーマ：「PDCAを理解する」
講師	安岡 高志（立命館大学）
到達目標	① PDCA サイクル活用の社会情勢が説明できる。 ② PDCA サイクルの基本的な考え方を活用できる。 ③ PDCA サイクルにしたがった報告書が書ける。
概要	
Part 1	大学の質保証とは何か、質保証のために PDCA サイクルが無ければ、質保証の達成はあり得ないことを解説する。また、PDCA サイクルが回っているかどうかを見る検定方法について述べる。
Part 2	PDCA サイクルの基本的な考え方について詳しく説明する。また、PDCA サイクルを導入するとは PDCA サイクルを活用できる人材の育成であることについて解説する。
Part 3	企業の例を紹介することにより、PDCA サイクルを回している組織で働く人々が普段どのような意識をもっているかを紹介する。

○オプション	分 野：「大学管理運営Ⅷ」 テーマ：「教職協働による大学運営」
講師	大島 英穂（立命館大学）
到達目標	①大学組織の特徴と教員・職員に求められる役割を理解する(知識) ②環境変化に対して自律性をもって対応できる(能力) ③教職協働により社会的要請に応える教育・研究を展開する(態度)
概要	
Part 1	教職協働とは ①「協働」とは ②立命館における教職協働 ③協働のあり方
Part 2	教職協働をめぐる状況 ①大学の機能の拡大 ②教職員構成の多様化 ③大学組織の特性 ④教職協働を進めるための課題
Part 3	職員の役割と学習する組織 ①職員に求められる能力 ②学習する組織 ③教職協働による大学運営のために

●必修	分 野：「FD 概論Ⅰ」 テーマ：「大学におけるミクロ・ミドルレベルでの FD 活動」
講師	佐藤 浩章（愛媛大学）
到達目標	①大学におけるミクロレベル（授業・教授法の開発）の FD 活動の事例を説明できる。（知識） ②大学におけるミドルレベル（カリキュラムやプログラム開発）の FD 活動の事例を説明できる。（知識） ③自らの大学におけるミクロ・ミドルレベルの FD 活動を批評できる。（知識） ④自らの大学におけるミクロ・ミドルレベルの FD 活動を積極的に推進しようとする。（態度）
概要	
Part 1	ミクロレベルの FD 活動の事例（公開授業） 日本の多くの大学で取り組まれている公開授業の基本的な実施方法を学びます。国内外の実践事例を参考にしながら、公開授業を効果的に進めるために必要な留意点を学びます。
Part 2	ミクロレベルの FD 活動の事例（授業コンサルティング） 諸外国の多くの大学で取り組まれている授業コンサルティングの基本的な実施方法を学びます。国内外の実践事例を参考にしながら、授業コンサルティングを効果的に進めるために必要な留意点を学びます。
Part 3	ミドルレベルの FD 活動の事例（3つのポリシー再構築） ディプロマ・ポリシー、カリキュラム・ポリシー、アドミッション・ポリシーの明確化と一貫性構築を進める実施方法を学びます。 またそれらを円滑に進めるために必要な組織体制のあり方についても学びます。

◎選択	分 野：「FD 概論Ⅱ」 テーマ：「大学におけるマクロレベルでの FD 活動」
講師	川島 啓二（国立教育政策研究所）
到達目標	①大学におけるマクロレベル（組織の教育環境・教育制度の開発）の FD 活動の在り方や実践事例を知る。（知識） ②積極的に自学での教学改善を進めようとする。（態度）
概要	
Part 1	マクロレベルの FD とは FD には、授業改善としてのミクロレベル、カリキュラム・プログラム開発としてのミドルレベル、そして組織・制度開発としてのマクロレベルがあり、三層構造をなしていると考えられる。大学設置基準上は「授業の内容及び方法の改善」とあり、現状ではミクロレベルの FD の事例が多数を占めるが、ミドル、マクロの FD が、今後は重要になってくると考えられる。
Part 2	大学教育改革の現代的展開と FD のつながり FD をとりまく現在の状況は、一般論としての授業能力の向上を求めているのではない。近年の大学教育改革の展開は、教育そのものがシステムの構成・展開されることを求めている。学士課程教育を受けた結果、学生が何ができるようになったか、即ち学習成果が焦点化されるようになり、それを担保するためのカリキュラムや制度設計の重要性が高まっているのである。つまり、システム改革と連動した教育改善が必要であり、FD を三層構造で捉える意味もここにある。
Part 3	マクロ FD 実際（と関連する知見） 現在の我が国で実践的に展開されているマクロ FD プログラムはまだ少ない。ただ、大学組織の改革やセンター組織や委員会組織のデザインと機能化といった取り組みもマクロ FD に含まれるし、欧米においてすでに豊富な経験を有している、管理職やリーダー的教員の職能開発を目指すアカデミック・リーダーシップも注目される。これからの大学教職員は、多様な能力を求められるようになってきており、ミクロ、ミドル、マクロ FD の 3 領域のバランスが肝要になるであろう。

○初°シヨ	分 野：「プロジェクト・マネジメント」 テーマ：「FD 活動推進等の大学経営革新に活かすプロジェクト・マネジメント」
講師	牧野 光昭（社団法人日本能率協会）
到達目標	①基本的なプロジェクト・マネジメントの概要（歴史、ねらい、手順）を知る。（知識） ②プロジェクトの成果創出への発足～計画策定のプロセスにおけるポイントを理解する。（知識・理解） ③プロジェクトの成果創出への組織的合意～振り返りのプロセスにおけるポイントを理解する。（知識・理解）
概要	
Part 1	プロジェクト・マネジメントの基本 ・プロジェクト・マネジメントのねらい ・プロジェクト・マネジメントの歴史 ・プロジェクト・マネジメントの手順、ステップ ・大学におけるプロジェクトマネジメントの対象と課題
Part 2	プロジェクト成果創出のポイント① ・目的・目標の明確化と共有化 ・プロジェクトに必要な作業分解と工数把握 ・作業工数から全体スケジュール策定 ・リスク分析（未然防止策の組み込み）
Part 3	プロジェクト成果創出のポイント② ・プロジェクト実施の意思決定（組織的合意を得る） ・実行とコントロール（進捗管理） ・プロジェクトの振り返り（評価／反省） ・大学の学内プロジェクト事例と成功要因 ・プロジェクト・マネジメントの実践にあたって（まとめ）

FD関連図書

教務課（衣笠キャンパス 有心館 1 階）に教育や FD に関わる書籍や資料を所有しています。貸出も可能ですので是非ご相談ください。

FD関連リンク集

□大学設置認可に関する関係法令・審査基準等【http://www.mext.go.jp/a_menu/koutou/ninka/hourei.htm】

＊「参考資料」フォルダには 私立学校法、私立学校法施行令、私立学校法施行規則、学位規則へのリンクも掲載

□大学基準協会の「大学基準」及びその解説

http://www.juaa.or.jp/images/accreditation/pdf/e_standard/university/u_standard.pdf

＊「参考資料」フォルダには 大学基準協会の経営系専門職大学院認証評価基準、大学基準協会の法科大学院認証評価基準へのリンクも掲載

□JABEE「授業時間」と「自己学習時間確保のための取り組み」に関する説明

http://www.jabee.org/public_doc/download/?docid=1132%E2%80%8E

□学士課程教育の構築に向けて（答申）

http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/1217067.htm

□大学教育の分野別質保証の在り方について（回答）（2010/07/22）

<http://www.scj.go.jp/ja/info/kohyo/pdf/kohyo-21-k100-1.pdf>

□全国私立大学 FD 連携フォーラム（JPFF）

<http://www.fd-forum.org/fd-forum/>

□名古屋大学版ティーチングティップス

<http://www.cshe.nagoya-u.ac.jp/tips/index.html>

□東北大学 高度教養教育・学生支援機構 大学教育支援センター PDPonline

<http://www.ihe.tohoku.ac.jp/CPD/PDPonline/archive/>

東北大学の FD 関連 VOD サービス

□大学教員のための授業改善ヒント集

<http://fd.code.ouj.ac.jp/tips/>

□REAS（リアルタイム評価支援システム）

<http://reas2.code.ouj.ac.jp/cgi-bin/WebObjects/top>

放送大学 ICT 活用・遠隔教育センターが提供する、アンケート表の作成から集計までをインターネットでできるシステム。簡単な操作で多彩な設問形式でアンケートをとることができる。

FDプログラム 受講チェックリスト 修了要件の確認にご活用ください。

*本プログラムは2年間で修了を目指していただきます。最長4年間まで、受講が可能です。

●オンデマンド講義（VOD）

修了要件：オンデマンド講義の視聴・アンケート回答が9講座以上

（必修8講義+選択15講義から1講義以上を選択）

	講座名	講師	チェック
必修	高等教育論Ⅰ	金子元久	
必修	教育方法論Ⅰ	林徳治	
必修	教育方法論Ⅱ	木野茂	
必修	教育方法論Ⅴ	安岡高志	
必修	心理学Ⅰ	白井利明	
必修	心理学Ⅳ	荒木穂積	
必修	立命館学Ⅰ	中村正	
必修	FD概論Ⅰ	佐藤浩章	
選択	高等教育論Ⅱ	有本章	
選択	高等教育論Ⅲ	江原武一	
選択	高等教育論Ⅳ	安岡高志	
選択	高等教育論Ⅵ	山田礼子	
選択	教育方法論Ⅳ	坂井知志	
選択	教育方法論Ⅵ	中島英博	
選択	教育評価論Ⅰ	鳥居朋子	
選択	教育評価論Ⅱ	野嶋栄一郎	
選択	心理学Ⅱ	西垣順子	
選択	心理学Ⅲ	徳田 完二	
選択	研究者倫理Ⅰ	望月昭	
選択	大学管理運営Ⅰ	肥塚浩	
選択	大学管理運営Ⅳ	鳥居朋子	
選択	大学管理運営Ⅶ	安岡高志	
選択	FD概論Ⅱ	川島啓二	

●ワークショップ（WS）

修了要件：ワークショップの参加が6講座以上

（必修4講座+選択8講座から1講座以上を選択）

	講座名・テーマ	チェック
必修	授業設計論演習Ⅰ（シラバス）	
必修	授業設計論演習Ⅱ（強制連結法）	
必修	授業設計論演習Ⅲ（マイクロ・ティーチング）	
必修	教育評価論演習Ⅰ（ループリック）	
選択	教育評価論演習ⅡA（TP A）	
選択	教育評価論演習ⅡB（TP B）	
選択	教育評価論演習ⅢA（CP A）	
選択	教育評価論演習ⅢB（CP B）	
選択	教授学習理論演習Ⅱ（ICT）	
選択	教育方法論演習Ⅱ（図形並べ）	
選択	心理学演習Ⅱ（イヌ・バラ）	
選択	心理学演習Ⅲ（アサーション）	

●教育コンサルテーション担当教員名 _____

